

3759
Y019
資料室

現代新鈔

教科
41
200

41983
教科書文庫

4
810
41-1924
200030
2230

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

教科書文庫
4
810
41-1924
2000302230

325.9
Y019

編 平 彌 田 吉

現代文新鈔

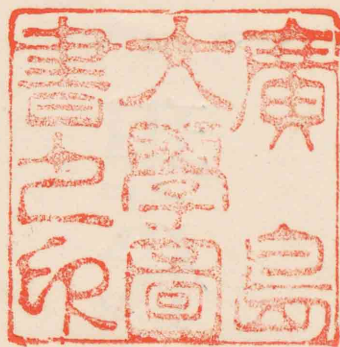
卷二

京 東
版 藏 館 風 光

現代文新鈔 卷二

目次

一	バッキンガム宮殿に於ける東宮殿下	若山牧水	一
二	春の木	北原白秋	二
三	心	田山花袋	二四
四	彦根	森林太郎	二〇
五	曾我兄弟	幸田露伴	二四
六	二宮尊徳	國木田獨步	三二
七	町はづれ	大町桂月	四〇
八	屋上の一	藤森秀夫	四三
九	蟬の蛻		四七



一〇	二百十日	夏目漱石	五三
一一	飛入りの力者	正岡子規	七五
一二	鎌倉権五郎	新保馨次	七七
一三	少年斥候	三浦修吾	八〇
一四	鳥島漂流ものがたり	五十嵐力	八九
一五	牛飼の歌	伊藤左千夫	一一〇
一六	乃木大將と萬屋		一一三
一七	安井息軒	森林太郎	一一三
一八	青葉の笛	萩野由之	一二七
一九	薩摩の健兒	田中白茅	一三五
二〇	天の配劑	菊池寛	一四一



現代文新鈔卷二

一 バッキンガム宮殿に於ける東宮殿下

晝

バッキンガム宮殿
倫敦にある
英國の宮殿
一七七五年
建造

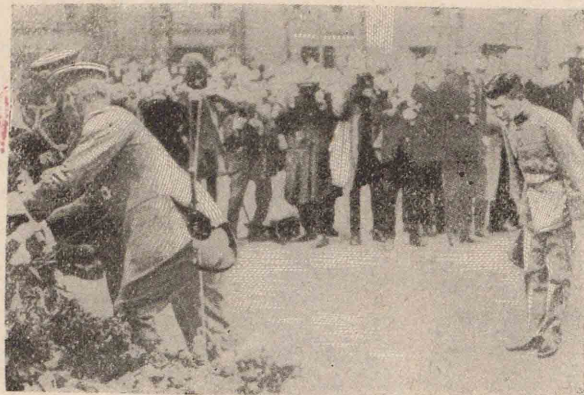
光榮に輝くバッキンガム宮殿。其の宮殿こそは、實に日東の皇太子殿下が國賓として（皇太子殿下）の意義ある三日を送らせらるゝ晴の御旅館であつた。我が東宮殿下にはヴェイクトリヤ停車場で英國皇帝陛下の御出迎をお受け遊ばして、それから公式の御馬車に御同乗の上バッキンガム宮殿に入らせられると、豫め宮殿内に殿下の御來着をお待受け遊ばされた英國皇后陛下は、メリー内親王殿下と共に、殿内弓の間に殿下をお迎へ遊ばされて、色々長途の御旅行をお犒（オウゴウ）ひのお言葉があつた。

一 バッキンガム宮殿に於ける東宮殿下

此の時我が皇太子殿下は、改めて英國皇帝陛下にも御對顔遊ばされ各供奉員コウイン扈從コウジュウ列立の席に於て、天皇陛下天皇陛下の手紙並に金銀製美術品本邦特産の織物などを兩陛下に御贈進あらせられ、兩陛下より我が天皇皇后兩陛下の御近情並に宮廷の御事に就いて種々御懇切なる御尋があつた後我が皇太子殿下は英國兩陛下並に皇太子殿下と御晝餐を共に遊ばされ終つて長途の御旅疲れもなく、たゞちに皇太后アレキサンドラ陛下を御訪問になつた上、午後四時三十分、バッキンガムの宮殿を御出門遊ばされた。

斯くて東宮・閑院宮の兩殿下を乗せ奉つた自動車は、熱誠なる拜觀者を以て満たされた沿道の町々を通つてホワイト、ホールの無名戦士招魂碑前に到着した時は、提督・將軍を始め海軍・陸軍・空軍の各代表者等が打揃うて御着をお待申上げて居つたが、東宮殿下には自動車をお下り遊ばされて、直ちに碑前に進ませられ、恭しく御脱帽遊ばされて御禮拜の後、月桂樹に

紅白取りませた花を配して飾りリボンを附けた其の上を日本の國旗で圍んだ美々しき大花輪を武官より御手に取つて捧げさせられ、二人の武



ホトイロ招魂碑御拜

官が更にそれを受取り奉つて記念碑の基底に手テ向むかけると、殿下は御脱帽のまゝ、で單身御前進遊ばされ、記念碑に向つて御拜あらせられた。

次いで閑院宮殿下が御同様御拜を遊ばされ供奉員亦それに倣ひ奉つて順次禮拜を終つた。

斯くして式が全く了ると、今まで碑前に近く道の兩側にトシ堵ど列りして垣、知、列、心靜肅に拜觀してゐた民衆は、一時に萬雷の落ちるがごとき響を以て、熱烈なる拍手を送り奉つたか、殿下は、歡喜の念を以て熱心に呼號し奉る民衆の叫の中を、自動車を驅

つて御退出、それより直ちにウエストミンスター寺院に赴かせられた。寺院ではそれと知ると、緋の衣を纏うた大僧正代理が之をお出迎へ申上げ、やがて殿下には其の御案内で寺院内に入らせられ、改めて大僧正代理その他に對し、お附添の英國高官の御紹介で御丁寧なる握手を賜つたのち、こゝでも亦無名戦士の墓に花輪を捧げさせられ、眞中に菊花の模様があつて、それに純白な花と眞紅の花との刺繡が施されてある座蒲團の上に御着座、御少憩の上、嘗てはアーヴィングの麗筆にも上り、詩的聯想の多く伴ふ寺院の中を大僧正代理の御案内によつて御巡覽、歴代の王廟や名士の墳墓や、それらを包容するゴシック式の大建築物に籠る千年の古いにほひに就いて、いろ／＼と歴史的の説明を聞き召された。殿下には其の度毎に御首肯になつて、御合點の行きかねる事は精細なる點にいたるまでも色々御下問遊ばされた。かくて五時寺門を御出になると、また其處にお歸を待受けてゐた群衆は、再び歡呼の聲を揚げて潮の如き拍手

アーヴィング
米國の歴史
家と文學者
(1783-1859)

を送り奉つた。

あゝ、熱誠なる歡迎。これ程まで眞實性に富んだ心からの熱烈な歡迎を、何處の皇太子が曾て受けられたらう。此の日倫敦市中で日章旗が盛に賣れて、仕入れても仕入れても忽ち盡きたと云ふことは、如何に我が東宮殿下が、民衆の心の中に非常な魅力を持つていらせられるかと云ふことを事實の上に示すものであつて、殿下が此の日停車場からバッキンガムの宮殿に向はせ給うた時も、特に熱誠なる市民に報いんが爲、御道程を御延長遊ばされて、ウエストミンスターから、次にはホワイトホール及びモールを御通過あらせられた事の如き、固より些末な事ではあるが、それが延いて英國國民の感情に良好な影響を與へたことは大したもの、其の御優しき心づかひは、老いたる翁媪をも泣かしめ、可憐なる子女をも歡ばせた。これより以後殿下の御通過毎に奉迎者の數が益多きを致し、御名之光榮を讚歎し奉るものが段々増加して行つたのは、全く其の源泉を殿下

の御人格に置いてゐるのであつた。
拜察するに、殿下當夜の御夢には、必ずや英國市民等の熱誠なる歡迎振と、
通御の沿道悉く皆日本國旗を以て各戸の軒頭を飾り、尙日英兩國の國旗
をあしらつたヴェニス風の柱を建て列ね、其の他種々の趣向をこらして、
殆ど全倫敦を彩旗の海と化し去つてゐた美しい光景が浮ばせられたこ
とであらう。

夜

光榮に輝くバッキンガム宮殿の晝が、殿下の御到着によつて始つたのに
對して、光榮に輝く其のバッキンガム宮殿の夜は、宮殿内の大舞踏室に於
て開かれた王宮晚餐會によつて其の第一幕を開いた。

其の夜の會場は、其の「輝く」と云ふ字が文字通りに當てはまる程燈光に輝
き、周囲の裝飾に輝き、式典に輝き、賓客に輝いたものであつた。其處には、

ロマンチック
1. 詩的、優美
2. 空想的、感清

戰時中會て一夜も見ることの出来なかつた華々しい美しい夜があつた。
壁は悉く目も眩いばかりの金欄を以て飾られ、玉座の下に近く食卓が作
られて、賓客は何れも金色燦爛たる禮裝をなし、食卓には全部黄金から成
つた食器が配置され、それらの凡ての輝かしいものが華やかな燈火の光
の中に相映發して居る光景は、大英國の昔ながらの典雅を思はせる、そし
てまたロマンチックなものであつた。

會場の開かれたのは午後八時半であつたが、其の時第一に先づ英國人が
所謂英國の偉大なる同盟國の皇儲たる我が皇太子裕仁親王殿下が、英國
皇后陛下と御手を組ませられつゝ、御入場になると、其の次には英國皇帝
が第一皇女の御手を取らせられ、閑院宮殿下は、メリー内親王を、英國皇太
子殿下はクリスチャン王女を伴はせられて靜かに御入場になり、やがて
我が皇太子殿下は英國皇帝陛下と、英國皇后陛下との御間に、閑院宮殿下
は皇后陛下の御右に、其の御隣にはメリー内親王が御着席あらせられた。

一 バッキンガム宮殿に於ける東宮殿下

斯くして主賓の方々の御席が先づ定まると、其の次には皇族首相各國大使、（二等以下）公使を始め、日本大使館員其の他重立つた陸海軍將官及び其の夫人たち百三十名が、何れも男子は皆綺羅美しき大禮服に光榮の身を裝ひ、夫人たちは色とりどりの華やかなドレスに光輝燦々たるダイヤモンドや眞珠を飾つて、電氣裝飾の光に照されつゝ入つて行つて各、皆定め

難後

馬車

金人

難後

珍田

伯爵珍田捨

己

今は東宮大

林

特命全權大

使男爵林權

助

此の時室内の有様を見渡すと、食卓は二個より成り、卓上には英國皇室の國寶とも云ふべき有名なる黄金の皿が飾られ、室内は普く赤のチュイリツプと白石楠花とを以て飾り、軍樂隊が一隅に控へて奏樂の合圖を待ち、侍者達は皆其の身分と職掌とによつて、小姓は白、舍人は緋色と黄金色、近衛隊はチュイールドル式の美しい制服を身に纏うて皇帝御椅子の直後に侍立し、席上には莊重嚴肅の氣分が充滿してゐた。此の夜日本側では、主賓におはせらるゝ東宮殿下、閑院宮殿下を始め奉り、珍田供奉長、林大使等を

永井
大使館參事
官永井松三

加へて二十一人の者が其の席に臨んでゐた。婦人としては只永井參事官夫人と伊丹夫人とが、（金色）金装燦爛たる男子賓客の禮裝の中に異彩を放つて居たのであつた。

乾盃

葡萄酒

焼

した

祝

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

した

斯くて宴酬にしてデザートコースに入るや、やをら御起立になつた英國、皇帝陛下は、我が皇太子殿下の爲に乾盃を遊ばされ、英國國民の賓客として殿下を厚く御歓迎申上ぐる旨を述べられてから、尙引續いて事こまやかな御演説があつた。
陛下の御挨拶が終ると、次いで御起立になつたのは我が東宮殿下で在らせられた。満場の視線は期せずして皆當夜の御主賓におはします我が殿下の御身に注がれたが、其の時殿下は極めて高聲に、極めて明瞭に、さしにもに廣い舞踏室の隅々にまでも響き渡るやうな威嚴のあるお聲で、大膽に御答辭を述べさせられ、珍田供奉長が英語に通譯し奉つて更に之を満場に徹底せしめた。

一 パッキンガム宮殿に於ける東宮殿下

殿下が御答辭を述べさせられて英國皇帝皇后兩陛下の爲に御乾盃遊ばされると、やがて晚餐會は終つて、それよりは接客室に移らせられての御歡談となつた。我が東宮殿下が御自ら積極的にお進みになつて多くの參列員たちの間にお交り遊ばされ、山本大佐を通譯者として極めて自由に御談話をおかはし遊ばされた御快活な御交際振には、一座の人々皆殿下の御聰明に感歎して「驚嘆すべき皇子」と讚美の言葉を捧げないものはなく、平常寡黙にして容易に自ら進んで他人との談話のサークルの中に加はらない無愛嬌なビーチー提督すら、殿下の御態度には動かされて航海の話や其の他の珍しい物語を殿下の御前に聞え上げたのであつた。殿下はそれからも尙一座の中心となつて、人々とお歡談をお續けになつていらせられたが、やゝあつて英國皇室側の御案内で繪畫館に入らせられ、數々の名畫を御覽になつた後、十一時半頃に宴席をお退きになり、十二時過を以て御就床。バッキンガム宮殿に於ける御生活の最初の一夜をお

過しになつた。

この夜に於ける殿下の御行動が、殊に良好な印象を何人もの胸に與へたことは云ふまでもない事であつたが、當夜の陪賓として、參列の光榮に浴した永井大使館參事官夫人が、別室で英國皇后陛下に拜謁した際、皇后陛下には、東宮殿下には御年齢もまだお若くあらせられるのに、況して今度は外國での御生活であるから、お慣れ遊ばされぬ言葉や風習などに就いて、さぞかし御苦痛で在らせられる事が多くあらせられよう。言葉さへちがつて居らねば、自分からも其の心を述べてお心をお慰めまうすのであるが、と御同情深く仰せられ、皇女メリー殿下にも、英國皇太子の御運動好きは餘り烈しいから、あのお相手では、日本の皇太子殿下も御運動好きでいらせられるとは承つて居るものゝ、或は御迷惑遊ばすかも知れない、と云ふお言葉があつたといふことで、其の外にも殿下の御噂は、到る處のあらゆる人々によつて美しく傳へられたのである。(東宮御渡歐記)

二 春の木

若山牧水

若山牧水
名は繁
歌人
明治十八年
生

尾上紫舟

若山牧水

前田夕暮

歌論

歌は体の中にある

歌は文字の刷り

名は繁

まゆ

日向

一月間 鈍切りめ

春の木は、水氣ゆたかに鈍切れのよしといふなり、春
の木を伐る。

大いなる鋏の手とめ、園丁はわれに木の名を教へけ
るかな。

いづ知らず摘みし蓬の青き香の指に残れり、停車場

に入る。

瀬戸の海や浪もろともにくろくといむれてくだ
る春の大魚。

松咲きぬ、楓も咲きぬ、初夏のさびしき花の咲きそめ
にけり。

晝深み庭は光りの吾子ひとり眞裸にして鶏追ひあ
そぶ。

秋霧の茄子のはたけに人居りき、やがて車をひきて
去りにけり。

胡桃の樹枝さしかはし溪あひの早瀬の上に薄紅葉
せり。

飲む湯にも焚火のけむりにほひたる山家の冬の夕
餉なりけり。

軒近き砂山松のうれ染めて、今朝も晴るゝか、冬日さ
し來る。

一春の木

三 心

北原白秋

北原白秋
名は隆吉
歌人
詩人
明治十八年
生

眞間
千葉縣南葛
飾郡常川町
字眞間
江戸川の左
岸
東京の東北
三里餘
三里餘
心雜註
物見方
ハラト見ル

ある歌自慢の人が眞間に尋ねて来て、私に歌を見てくれと云つた。大概かういふ人の見てくれは教へてくれといふのではない。驚いてくれ褒めてくれといふのである。私はさういふ人の心もちはよくわかつてゐるし、ほどくにしてゐる。かういふのはいけないのだと云つたところでのぼせてゐるので、わからう筈はなし、先方でほんとに教はりたいといふへりくだつた心が無い以上、私の方でもむきになつてやりこめる必要は無い。なるべくせいぐ批評の水準線を低めて、少しでもいゝところがあれば、それを見てやつて、まあ結構ですぐらゐにしてさふ。でなければ第一私の時間が役に立たぬ事つぶれて了ふし、たゞもう頭を下げて一時も早く歸して了ふ方がよい。何を云つたつて、お天狗さんにはわからないのだから、ひとりてに歌のむつかしさに恐れ入つて、はじめて顔

を赤くする時節を待つてやるより外はない。一人であつて、自分の歌に顔が赤くなれば、しめたものである。

そこで、その人もさういふ人だとすぐに見て取つたので、まあ散歩でもして見ようと一緒の外に連れ出したものだ。歌の自慢なぞ聞くより、外へ出て雲でも見た方がどれだけせいぐするか知れない。どうせ時間をつぶすならその方がよい。その人は途々も何かしらしゃべくつてゐたやうだが、私は夕方の方の空や田圃の景色にばかり眺め入つてゐたのである。まだ赤い夕焼が西の空には残つてゐた。眞間の小川の土堤の上を歩いてゐると、ふとその人がしゃがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何といふ可憐な繪模様だつたらう、私は思はず立ち止つて了つた。其處には鮮かな裏白の葉の河楊が水の面に揺れてゐた。其の撓んで揺れ動いてゐる一つの枝にはまだ小さな燕の子が一羽留つてゐた。又一羽來た。枝は愈揺れる。枝の先は水へついて波を立てゝゐる。燕の子達

は紅い頬を揃へてさもく、恐しさうに啼きたてる。又一羽留ると枝はいよく揺れ出した。ともすると滑り落ちさうになるので、今は必死となつて縋りついてゐる。そのつやくした黒い裂羽サキバ、いたいけな啼聲ウレウレ。それだけでもかはいゝのに、また一羽はたゞいてつい近くまではやつて来るが、枝の上の燕の子はそれを見て、慌てゝ、いけないく、と啼く。これ以上留つては枝がすつかり水につかつて了ふのである。空の一羽は留るには留られず寂しさうに啼きながら翔つては近より、近よつてはまた翔り出す。

その燕に向つて小石を投げたのである。

私ははつとしたが、それでも黙つてゐた。寂しい氣持で微笑みながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さうしてあるところまでその人を送つて行つてから、左様なら、またお出でなさいと別れの握手をした。それで歌は到頭見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけの歌かわかつて

了つたのである。無論、どれだけの歌を作る人かもわかつてゐる。何故か。

それは、その一事で、その人の人柄がまだ出来てゐないといふのがはつきりと私にわかつて了つたからである。「心」ができなければ歌はできない。少しでも心の修業、ことにこの道の修業が積んだ人なら、また少しでも繪や音楽の事がわかる人なら、夕焼の空にまづ心惹かれる。眞間の小川の薄明りにまづ心を唆られる。その薄明りの中に河楊が揺れてゐる。揺れる小枝に心も揺れる。揺れる小枝は燕の子が動かしてゐる。燕の子も動いてゐる、啼いてゐる、しがみついてゐる。これだけでも生きた燕の生生命カを感じずる事ができる。小さな燕にも大自然天帯の生が揺れに揺れてゐる。繪の方から見ても、黒と頬紅と白と緑の葉と、撓んだ枝と水の色と夕焼と、これだけでも立派なものである。音楽の方から云つても、何ものにも微妙な調子調子のあらはれがある。みんな動いてゐる。さまざまに強く弱

象徴詩

マレリス
マレナラ

くゆらいでゐる。それに一羽來、二羽來、空にも一羽留りもやらず翔つてゐる。あはれは益、深く益、揺れるばかりである。観た眼から云つても三羽すり寄つてしがみつゝ姿はいゝ。近よりかけて枝が揺れるのに驚く燕の形もいゝ。それらの動くリズムも愈、こまやかになるほどいゝ。燕の「心」そのもの、「生」そのものを深く観て、その「心」を自分の「心」とし、その「生」を自分の「生」とおんなじに観る、私達の突きつめた觀照からも、それは立派な象徴の詩や歌そのものである。

感じさ意色を以て表す文章

これだけの事は、一寸見た瞬間に、凡てが自分の頭に這入つて來るべき筈である。眼で見、耳で聴くだけはまだしも、靈全體ではつと感じる位でない。

ゆが風が然に青し
さらば善を、幼あけ
つかれたま青き葉が
月影よとと葉を、その人ははつとは思つたが小石を投げた。

人間ができてゐない。詩人として修業が積んでゐない。歌などは見なくともわかつてゐる。くれぐれも云ふが、これは人間は萬物の靈長であ

る、それであはれな鳥や小蟲をいぢめてはいけないと云ふ修身や説教の心もちばかりでは無い。自分の道とするところから、もそつと深く美しい心もちでいふのである。

とところでその人は小石を投げた。みすく、淺はかな事だと知りながら、何故にまた私が、それを咎めたり説き諭したりしなかつたかといふ事であるが、云つたところで分りさうにもなく、云へば云ふほどうるさくなる。何かと口答へする。人としての深い關係が無いかぎり、聞かれもせぬ事を知つたかぶりするにも當るまい。先づく、知らぬ顔して微笑してゐた方が一刻も早く別れられる。不親切のやうであるが、強ひて私は説教者にはなりたくはない。佛も、縁なき衆生は度し難し。と云はれた。

縁なき衆生は度し難し
衆生は度し難し
佛も縁なき衆生は度し難し

(洗心雑話)

四彦根

田山花袋

田山花袋
名は録
小説家
紀行文家
明治四年生

彦根の樂々園水うき物所に来て始めて水郷らしい感じを味つた。もう日暮に近かつた。それに雨さへ降り出して來た。眞菰マコモや蘆の繁つた向ふには、湖の入江がひろく、と寂しく且錆びて横たはつてゐて、割葦ワザの聲と蛙カエリの聲が湧くやうに聞えた。

「好いな」

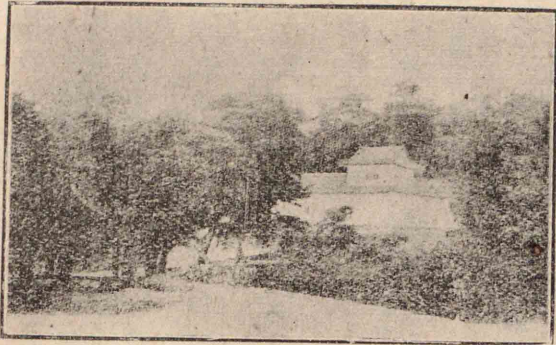
古く感じ、新しい感じ、
明く感じ、新しい感じ、
真一現代
大津長濱の彦根

から私は獨りて言つて、一日船に車に乗り疲れた體を縁側の處に持つて行つた。私はかういふ町が此處に残つてゐようとは思はなかつた。封
建時代そのまゝになつてゐる城址・天守閣、昔と少しも變らない大きな鬱蒼とした樹木、その間にをりく、見える城樓の白壁、それを取巻いた濠に眞菰マコモや藺アヤの蘆の叢生してゐるさまも私に詩を思はせた。井伊家の別邸別邸に行く車の上で、年を経て蘆の葉しげり、水草生ひ、蛙カエリのたるとるの濠ホとなり

城下町
田山氏の生
地上野國館
林町をさす

き。といふ歌をよんだが、かうした城下町に生立つた身のいろく、幼時のことかと思ひ出されて、父母や祖父母のことなど脈々として面影に迫つて來るのであつた。五十年も六十年も世に後れた寂しい懐かしい町、そこに住む人達の生活なども思ひやられて、大津長濱あたりの明るい繪

丹羽長頼
石田三成
伊井直政



彦根城

の様な町と好對照をなしてゐることを思つた。それにその城址の佐和山と相對してゐる形が、私に昔の英雄たちの成敗の跡を偲ばせた。しかし、もしこれが薄暮でなかつたならば、また空氣が雨意を帯びてしつとりと重くなつてゐなかつたならば、また城址の中が荒涼としてさびしさに閉されてゐなかつたならば、或は彦根の町そのものに對してもこれほどの印象を受けなかつたかも知れない。それに一日の遊に疲れ果

四彦根

支那 琵琶 江近 琵琶 琵琶
遠浦 琵琶 琵琶
山形 琵琶 琵琶
江天 琵琶 琵琶
琵琶 琵琶 琵琶
琵琶 琵琶 琵琶
琵琶 琵琶 琵琶
琵琶 琵琶 琵琶
琵琶 琵琶 琵琶
琵琶 琵琶 琵琶

てた私の心と體とが更にそれを色濃くしたのであらう。
私に當てられた樂々園の一間が奥の閑雅な一室であつたことも限な
く私の心を落着かせた。剖葦は頻に鳴く、雨の絲のやうに細く降りしき
る中を、蓑笠をつけて船を漕いでゐる漁師達も昔の古い繪そのまゝであ
つた。

「好いな」
から私は繰返して言つた。
舞台 光景
場面

私は昨日から一周した琵琶湖のさまじくのサインを頭に繰返した。白
いペンキ塗の瀟洒たる遊覽汽船、昔の儘の瀬田の長橋、南郷の洗堰ではこ
れから宇治に出て行く間の山中にある溪流の音と村落の平和とを思つ
た。石山・粟津すべて曾遊の地ではあつたけれども、皆それ／＼に私の興
を惹いた。小舟に乗つて蜆を掬つてゐる漁師達の姿もめづらしかつた。
それから私達は湖の西岸にわたつた。思ひ出すのも容易でないやうな

まう
な
な

いろ／＼のサイン、とてもこれだけをかう短時間に自分で廻つて見るこ
とはむづかしいと思つた。

しかし何と言つても琵琶湖の美は堅田以北であつた。普通に八景と言
はれるところはあまりに人口に膾炙しすぎたためか、それとも度々来て
見て知つてゐるためか、或は實際湖が衰へ果てゝ了つたためか、私の心を
動かすやうな新しさと鮮かさとを持つてゐなかつた。しかし年來琵琶
湖をさう好いと思つてゐなかつた私も、かうぐるりと巡遊して見ると、流
石に心を動かさずにはゐられなかつた。水も深かつた、従つてその色も
大津や唐崎あたりで見たやうなものではなかつた、飽くまで自然の懐に
身を抱かれたやうな氣がした。(湖のほとり)

五 曾我兄弟

森 林 太 郎

森林太郎

蘭外と號す
文學者
衛生學者
醫學博士
文學博士
陸軍軍醫總
監帝室博物
館總長
大正十一年
歿
年六十一

場所 (伊出の農家)

人物 (曾我の從者鬼王、丹三郎登場しあり、そこへ五郎登場)

丹三 お兄上様がお歸りなされて、

鬼王 お待兼でござります。

伊出 五郎 さうか。兄上は歸らしやつたか。

富士山の西
麓の裾野
建久四年五
月源頼朝富
士野の狩の
をりの旅館
のあつた處
今駿河國富
士郡白絲村
狩宿
そこに曾我
兄弟を祀る
曾我八幡と
いふ小祠が
ある

十郎 五郎、待つてをつたぞ。(從者等に)そち達は暫時遠慮いたせ。

從者等 はあ。(退場)

十郎 (小聲にて) 五郎。いよく今宵ぢやぞ。叔、工藤が假屋ぢやがな。案内は豫て知つてをるが、精しい様子を探りたさに、けふ午過の事であつた、大幕の間を覗いて、ふと家人等に見咎められ、ゆくりなく酒宴の相伴

第二幕

十郎、工藤、假屋より

第二幕

工藤、假屋より

をいたいた。客には吉備津宮の宮司がをる。宮司はさして妨にもなるまい。かう何もかも分つて見れば、結局見咎められたのが、僥倖かとも思ふたが、又つくづくと思ひ返せば、慙に面を曝して、若し用心でもせられては、諺に謂ふ毛を吹いて疵を求めたやうなもの、只そればかりが氣懸りぢや。

五郎 (小聲にて) なに。用心をいたいたと申して、何程の事がござらう。あ、時節到來、喜ばしや。此の上は冠者原に、昨夜したゝめた文を持たせ、曾我へ返さうではござらぬか。

十郎 (小聲にて) さうぢや。遅れては門出の邪魔ぢや。(呼ぶ) 鬼王、丹三。

兄弟 これへまゐれ。

(二人登場)

二人 はあ。

十郎 そちたちを呼うだは別儀でない。雨中夜陰の遠路ゆゑ、苦勞には思

五 曾我兄弟

はうが、今から曾我へ使に參れ。

鬼王 そんなら今宵

丹三 お二人様が

二人 お打入になりまするか。

五郎 しつ。

十郎 (小聲にて) いや。そち達には隠し果つべき事でもない。さりながら、

あさましき此の同胞に

年頃仕へし幸なさよ。

報いせんとはしつれども、

我等の力及ばねば、

其の儘けふの別になつた。ゆるしてくれい。

鬼王 勿體ないお詞ながら、それより今宵の御供に。

丹三 どうぞお連れ

二人 下さりませ。

五郎 いや。それはならぬ。曾我にござる母の許へ、遣るべき使者は外に

ない。

鬼王 そんなら、どれ程願ひましても、

五郎 ならぬ。(起つ)

十郎 (起つ) 篤と胸を落ち着けて、得心いたいて立つてくれい。

(兄弟奥へ退場)

鬼王 こりや、丹三。伊賀の山田の冠者が事をお主は聞いたことはないか。

丹三 いゝや。知らぬ。それがなんといたいたのぢや。

鬼王 先年、さいつ年、伊賀の國人で、山田の小三郎惟行と云ふ六波羅殿の郎黨が

あつた。それが保元の軍に八郎御曹司と對陣して、討死と心を定め、一

人の冠者に故里への言傳を逃へた。すると其の冠者がな、口惜しい仰

を承つたと云うて、主より先に敵陣へ駈込うて討死した。

丹三 ふん。分つた。我々二人も死ぬるまでぢや。

鬼王 さうぢや。死ぬるより外、途はない。さりながら御兄弟と我等とは、
まだ總角の昔より

四人はなれぬ中なれば、

尊き卑きのけぢめさへ

忘れて年を経しものを、

今宵のお供が慍はぬとは、なんたる無念の事ぢややら。思へば胸が煮
え返る。

丹三 おう。さもあらう。河津家の敵は我等が敵ぢや。討ちたい心に高
下はない。なぜ下司神し者下夜には生れたやら。

(二人手を取り、泣く)

鬼王 あゝ。めゝしい歎ぢや。

(雨の音)

折好く降り来る雨の音に、紛れてこゝで刺違へ三途の川で御兄弟が、本
意を遂げて來られるのを、お待受申すまでぢや。お待受申すまでぢや。支度最中のお二人
が、よも聞咎めはなさるまい。

(二人胸を開き互に、刃を擬す)

鬼王 っび。

丹三 っび。

五郎の聲 (奥より) やあ、兩人、暫く待て。

(十郎五郎登場打入の支度、記念の品を持つ)

十郎 神妙いんまじなそちたちが志は、生々世々忘れぬぞよ。さりながらそちたちは、
穉い時に親に別れ、母を残して死に、行く子供の心を知らぬと見え
る。なんの我々兄弟が、そちたちを卑しんで、具して行かぬと申さうぞ。
どうぞ我等になり代つて、母上に逢うてくれい。

(遺書と記念の品とを出す)

此の文と小袖とは母上に奉る。貧しき中に飼ひならせし二匹の馬には鞍を置いて、祐信主にまゐらせる。又弓矢と行藤とはそちたち取つて記念にせい。

鬼王 さては死ぬにも死なれませぬか。

五郎 時移つては詮ない事ぢや。

十郎 疾うくちゆうとくまゐれ。

二人 はあ。

(鬼王起ち、厭より馬を牽出し、丹三郎と共に、記念の品を結び付け、蓑笠を着く)

鬼王 そんならこれでお暇をいたします。

丹三 此の上は只御本意を首尾好うお遂げなさるやう、切にお祈り

二人 申します。

十郎 そちたち二人も

兄弟 堅固で暮せ。

(鬼王、丹三郎退場。○十郎、五郎疊牀几に坐す)

五郎 兄上、今鹿島立かきしまたてするからは、これが互の顔の見をさめ。

(手を取る)

十郎 父の命いのちの血をわけし

五郎 わが兄上あにさまのかんばせも、

十郎 家弟あにがへ汝が面影も、

在すが如き思の種、

兄弟 お懐かしうござりまする。

(鐘の音)

十郎 もう亥の刻ぢや、いざ、打立たう。いざ。

五郎 いざ。

(雨の音・幕)

(高瀬舟)

幸田露伴

名は成行

文學者

慶應三年生

六一 二宮尊徳

幸田露伴

先生

二宮金次郎

一、御理り大家

二、更紗道徳

三、村世清氏

四、政道道徳

五、大久保昌良

六、三ツ木五

七、老中

八、家老格の家来

九、臣に成るを持え

十、民に對

下野田櫻町復興

天保七年の飢饉にあたり、駿河・伊豆・相模の小田原領の民の困苦最も烈しく、草根を掘り、樹皮を嚙むほどなりければ、小田原侯家臣をやりて、先生を野州より召出さんとし給ひけるに、先生肯ひ給はず、今凶饑の時にあたり此の地の民を救はんとして寸隙スニヒタだに無きに、我を召し給ふとは何ぞや。尋問の事あらば、君みづから來り給ふべし。と答へられけり。使者は怩ヒカリりて此の旨返り言申しけるに、我誤れり。事の仔細も告げずして招かんとしたるゆゑ、其の様に答へしは道理なり。汝再び彼の地に至り、加賀守過虚名虚言ちたり。と二宮に傳へ、且、小田原領民飢渴に逼り居れば、早く來りて飢民を救ひ、我が心勞を安めんことを頼む。と傳へ言ふべし。と大久保侯の言ひたまへば、使者は復櫻町に行きて委細を傳へけるに、此の度は先生命を奉じて此の地の撫恤終り次第、彼の地に立越えんよし答へられしかば、使者

は悦び歸りけり。君侯此の事を聞き給ひ、大いに悦んで群臣を召し、二宮の功あるは既に明白なれば、之を賞する道道なきはあらずなくてはあるべからず。祿若干を與へ、用人格出納人に取立つべし。と命ぜられけり。

先生野州の處置を終へ直に出府せられしに、折しも君侯病發して上下ともに憂ひわづらひけるが、侯は二宮來りし由聞きて大いに悦び給ひ、先づ是を賞せよ。と命ぜられ、いよく恩祿を下し給はんとする前日、麻上下麻人の後、青をかしを賜ひけり。普通の者ならんには恩賜の禮服とて悦び受くべきに、先生は之を見給ふより色を作して曰はる、やう、これ小生には不用のものなり。謹みて返上いたさん。今數萬の國民飢渴に逼れり。遙に臣を呼出してこれを救ふことを命ぜられたれば、取るものも取りあへず出府いたせるなり。ひそかに思へるは臣の來るや否や、如何にして民を救はん。と問ひ給ひ、臣に下すに米粟イヌを以てせらるゝならんと。然るにかゝる物を賜はらんとは思ひもかけず。此の禮服を寸斷して飢ゑたる民に與ふとも何

の用にか立たんや。無益の賜を受けんこと思ひも寄らざることなり。」と。君侯これを聞きて「我過てり。其の物を二宮に與ふることなかれ。」とぞ云はれける。大久保侯も賢君といふべし。

また役所より先生を招きければ、嗚呼われ今一時も早く小田原に行かんとするばかりなるに、我を役所に呼ぶものは、我に祿位を與へんとするに、てはあらざるか。祿位を我一人受けたりとて、民に何等の益あらんや。與へんとせば千石を與ふべし。直に飢民に頒ち與へんのみ」と恐るゝことなく先生至當の論を吐かれけるに、侯またこれを聞き給ひ、「二宮の云ふところ一々道理なり。祿位を與ふることなかれ。今我が手元の金千兩を二宮に與へん。領民を助けんための米粟は小田原の藏を開くべし。外に金をも與ふべし。」とて一々其の如くせられければ、先生直に小田原に行かれけり。

大久保侯病中二宮飢民救助のために小田原に行きしよし聞かれて「金次

至當
至論
至善

無人論
命一生

救物
救心
修身
齊家
治國
天下

大元
名を主
皇東

郎我が言を承知せしか。病中の安心何事か之に如かんや。」と悦ばれけるが、それより日々に病重り行かれけるこそ是非なけれ。侯も自ら起たざることを感じ給ひ、重臣たちを枕邊に召され、多年二宮を擧げんとして果さず。治國安民の任を彼に託するに及ばずして我が命こゝに盡くといへど、汝等志を継ぎ心を合せ我が孫を輔佐して二宮を擧げ、國家を安泰ならしむべし。」と懇々と遺言して終に逝かれけり。

先生は大久保侯の命を受くるや否や早くも小田原に至り、君子をして窮民を救はしめんがため手元金千兩を我に賜ひ、米粟は小田原に於て藏を開き用に當てよと命じ給へり。速に米廩を開かん。」と大夫・城詰のものら救荒の評議區々なるところへ云ひ出されければ、諸士一度は喜び又一度は疑ひ、「未だ倉廩を開くべき由の命令我等に下らず。君命にあらずして廩を開かば後日の咎免れ難し。此の旨を早速江戸に伺ひて後命あらば開くべし。」など云ふものあり、紛々として衆議決せず。先生其の時聲を勵

まし、怪しかる人々の言葉かな。今民の命旦夕に迫り、君侯病苦をも忘れられて之を救はんと憂ひ慮り給へり。然るに各位君の爲に圖りて忠に民の爲に圖りて仁なるべき職に在りながら、君意民情を外にして咎を恐れ、空言空坐するは何事ぞや。われ來らずとも先づ倉廩を開き、民の死を救ひ、然して後君に告げ、自ら罪に服するも尙可ならずや。然るに我君命を傳ふるも尙疑ひて江戸に伺はんなどは餘りに手緩し。往返の間に民の死する者それ若干なるべきや。されども各自身の罪を恐れて民の死を顧みざるやうの覺悟にては我言ふとも無益なるべし。唯此の評議決するまでは各位もまた斷食して民の飢苦を分ち給ふべし。飽食して飢民を救ふことを座上に空論せば何れの時か決せんや、小生も斷食して此の席に留らん。各位もまた斷食し給へ。と雷の落つるが如く警められければ、流石に衆人迷を去り、即刻倉を開くことに同意しけり。先生たちちに座を起つて倉廩に走り、早速藏を開けと命ぜらるゝに、守者

卒去リを位以上
卒去リを位以上

また君命なければ開かずといふ。先生また然らば我と共に斷食せよと大音に諭されけるに、ぞ遂に倉廩を開きける。先生すなはち苞數を點檢し、運送の手配りを定め、終日終夜休み給はず、撫恤に心を盡されけるが、かかるところへ、使來りて大久保侯卒去のよし告げ知らせけるに、先生此の由を聞きたまひて大いに悲しみ歎き、嗚呼已んぬるかな。我此の君に値遇してより十餘年、千辛萬苦を盡せるに、事半にも至らずして卒去し給ひては、自今誰と共に此の民を安んぜんや。と前後不覺に哭かれしが、いたづらに歎きて何か益せん。今飢饉にして民の死生の時なるに、豈怠りて濟むべきや。一刻も空費せず、君の意を體して救ひ賑はさんのみ。と涕を拭きつゝ、巡回し、及ぶだけの力を盡されければ、飢民のその救助に頼るもの四萬三百九十餘人、領内饑寒に死ぬるもの無かりき。されば人民みな深く此の恩を荷うて先生を慕ふこと父母を赤子の慕ふが如くなりき。大久保侯卒去の後、小田原の老臣等先君の命を奉じ、先生に請うて領内に

先生の仕法を行はれんことを求めければ、先生乃ち根本よりして分度分限定を定め、出入を籌かる大法を説き聞かせられけれども、老臣等其の器にあらねば其の説を行ふに堪へず、兎角に言紛らして根本の改革をなさず、たゞ實際に先生の道を行はれんことをのみ求めけるにぞ、先生も勢の如何ともし難きを思はれ、一二邑に手を下して例の如くに廢れたるを擧げ荒れたるを拓く道を施されけるに、もとより先生の徳には懐きたる民なれば、其の結果も早く擧りて徳風の及ぶところ、七十二村にまでわたりぬ。

されども先生、しばし、國本分度確立せりや否やを尋ねらるゝに、家老等は其は國家の大體なれば容易に決すべきにあらずといふのみにて少しも埒明かず、遂に先生をして飄然と櫻町に歸らしむるに及べり。領民等は先生の去られし所以も行かれし處も知らねば、唯みづから誠意の足らざるを悔い居たりしが、櫻町に歸り給ひし由を聞きて諸村の里正・細民等村長わざ／＼野州まで來り、衰邑興復の仕法を歎き願うて止まねば、先生日夜

教ふるに修身齊家の大道を以てし、日々數千言、皆其の人物に應じて諭さるゝに、至誠の教誨に感激して寢食を忘れ涙を流すものあるにいたりぬ。此の間、先生の教を會して故郷に歸り衰廢を擧ぐるものさへ少からず。先生遂にまた民を憐む情止み難く、天保十年の冬野州を發し、小田原に歸られけるが、翌年の春はまた野州に歸り給ひけり。小田原領内の民先生の徳風に化し、競つて業に勤め辛苦に忍び、殊勝の行狀多かりければ、他邦の者さへ風を聞きて感じ、奮つて起つもありけりとぞ。然るに弘化三年にいたり、如何なる仔細にや、小田原にては先君以來の仕法を廢し、領民の先生の許に往返するを禁ずるなど不法の處置多かりければ、流石の先生も怏々として樂しまず、愀然として歎ぜられ、嗚呼我が道こゝに廢せり。予聞く、君子は天をも怨みず、人をも咎めずと。予もまた誰を怨み誰を咎めん。皆我が誠心の足らざるよりなり。我が道の本源たる小田原既に我が道を廢したるに、我他に行きて此の道を立てなば、小

田原の非を顯すに當りて、實に心苦し。諸方の仕法をも一時に廢じて以て小田原の非を掩はんか。先生理を見る明かに一生疑惑をいなくと少き君子なりしが、此の時は困苦心勞に疲れられけるが、小田原先君の墓に詣りて此の事を告げ、合掌時を移して、如何なる心か抱かれけん、默然として流涕せられぬ。其の後先生身を終ふるまで、心中つねに小田原に再び安民の道行はれんことを祈られけりとぞ。讀むもの深く此の時の先生の心中を察せば誰しも涕の出づるなるべし。(二宮尊徳)

七 町はづれ

國木田獨歩

國木田獨歩
名は哲夫
文學者
明治四十一年
年歿
年三十八

必ずしも道玄坂と言はず、又白金と言はず、つまり東京市街の一端、或は甲州街道となり、或は青梅道となり、或は中原道となり、或は世田谷街道とな

自然主義的
虚構—現實
虚構—現實
表裏—裏面

暗黒面

牛馬と馬蹄草

運命論者

武藏理

シルケネー

武藏野の越味

復

つて郊外の林地、田圃に突入する處の市街ともつかず、宿驛ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場所を描寫することが頗る自分の詩興を喚び起すも妙ではないか。

なぜ斯様な場所が我等の感を惹くだらうか。自分は一言にして答へることが出来る。即ち斯様な町外れの光景は何となく人をして社會といふもの、縮圖でも見るやうな思をなさしめるからであらう。言葉を換へて言へば田舎の人にも都會の人にも感興を起さしめるやうな物語、小さな物語、而もあはれの深い物語、或は捧腹するやうな物語が二つ三つ其處らの軒下に隠れて居さうに思はれるからであらう。更に其の特點を言へば、大都會の生活の名残と田舎の生活の餘波とが此處で落合つて緩かに渦を巻いて居るやうにも思はれる。

見給へ、其處に片眼の犬が蹲つて居る。此の犬の通つて居る限が即ち此の町外れの領分である。見給へ、其處に小さな飲食店がある。外は夕闇

七 町はづれ

が籠めて煙の臭とも土の臭とも分ち難い香が淀んで居る。大八車が二
臺三臺と續いて通る。其の空車の轍の響が喧しく起つては絶え絶えて
は起りして居る。見給へ、鍛冶工の前に二頭の駄馬が立つて居る。其の
黒い影の横の方で二三人の男が何事をかひそくと話し合つて居るの
を。鐵蹄の眞赤になつたのが鐵砧の上に置かれ、火花が夕闇を破つて往
來の中程まで飛んだ。話して居た人々がどつと何事をか笑つた。月が
家並の後ろの高い檜の梢まで上ると、向ふ側の屋根が白んで來た。
カンテラから黒い油煙が立つて居る。其の間を村の者町の者十數人駆
廻つてわめいて居る。色々の野菜が彼方此方に積んでならべてある。
これが小さな野菜市、小さな糶賣場である。日が暮れるとすぐ寢て了ふ
家があるかと思ふと、夜の二時ごろまで店の障子に火影を映して居る家
がある。理髮所の裏が百姓家で、牛の呻る聲が往來まで聞える。酒屋の
隣が納豆賣の老爺の家で、毎朝早く納豆々々と噺れ聲で呼んで都の方へ

向つて出かける。

夏の短夜が間もなく明けると、もう荷車が通りはじめる。ごろ／＼がた
がた絶え間がない。九時十時となると、蟬が往來から見える高い樹で鳴
きだす。だん／＼暑くなる。砂埃が馬の蹄、車の轍に煽られて虚空に飛
上る。蠅の群が往來を横ぎつて家から家、馬から馬へ飛んである。そ
れでも十二時のどんは微かに聞えて、何處となく都の空の彼方で汽笛の
響がする。(武藏野)

八 屋上の一 夜

大町 桂 月

大町桂月
名は芳衛
文章家
明治四年生

一昨夜も蒸暑くして寢苦しかりき。昨夜も然りき。今夜も亦かと思へ
ば、住みなれし我が家も火宅に異ならず。さは云へ避暑とは意氣地なき

八 屋上の一 夜

次第なり。われ年々殊に夏季好んで旅行すれども、これ暑を避けんとするに非ず、俗累を脱して思ふやうに讀書若しくは執筆せんとするなり、温泉若しくは海水に浴して、心身を健全にせんとするなり、自然美を楽しみまして氣を養はんとするなり、史跡を探らんとするなり、自然美を楽しみんとするなり、氣張つては見たれどもとく、凡夫の身、やはり暑きよりは涼しきが氣持よし。晩食の後、屋上なる物干臺の上に涼を取りけるが、ふとこゝに一夜を過して見ばやと思ひつきたり。

夏の夜や
寶井其角の句

「夏の夜や蚊を疵にして五百兩」と詠じけん、屋上も又蚊軍の來襲を免れず。蚊帳を持來りて四方の柱に釣り、蒲團敷きて臥す。三男も俱にす。上弦の月西天に在り。南風稍強くして蚊帳の裾揚る。石を置きて之を鎮す。涼しき風も、蚊帳の中にはその三分一も入り來らず。明らかなる月も、蚊帳の中にてはそれとも見えわかず。蚊帳の外に出づれば、清風明月えも言はぬ心持なれど、いつしか蚊來りて螫す。また蚊帳の中に入る。十時

七月一日直夜
花有情香月有陰

を報ずる時計の音聞えて、間もなく西隣の家は雨戸を締めたり。しばらくして北隣の家も雨戸を締めたり。余の寢入りしはそれより幾分の後なりけん。

ふと目覺むれば、月はすでに落ちたり。星稀にして雲頻に動く。風も絶えたり。屋内に入りて時計を見しに十二時半なりき。遙かに聞ゆる汽車の音を最後にして、人間の活動は全く絶ゆ。四邊人籟なくして、天茫茫たり、地漠々たり。たゞをりく、五位鶯の聲を聞く。その五位鶯すべてみな言ひあはせたる様に、東北より來りて西南に去る。眞夜中は鳥の活動する時なるかと思ふほどに、はや雞の鳴くを聞く。この次に鳴くものは何なるかと耳を欬てしに、凡そ二時間も経ちしと覺しき頃、蝸の鳴くを聞きぬ。この次は何かと待ちかまへしに、思ひがけずも鶯の谷渡りを聞きぬ。都や戀しき山や憂き夏は山ならでは鶯を聞くに由なきこと、ばかり思ひ居たりき。今こゝに始めて夏の最中、都にて鶯を聞くにつけて

も、物事は妄に断定を下すべからざるものと思ひぬ。この次は何かと待ちしに鴉カラスなりき。その次は雀カラスなりき。かゝるほどに、空漸く白みて、がらと牛乳配達チウが箱車を挽來るを聞く。人間の活動こゝに始らんとするなり。空を飛びゆく五位鶯は別にして、人間に先んずる鳥の活動はカシラ雞が魁にして、雀が殿カシラなりき。三男はぐつすり寝入りて、雞の聲も、鶯の聲も、鴉の聲も、雀の聲も一切知らぬ様子なり。牛乳配達チウの車の音を聞く頃になりて、余はまた寝入りしが、幾時間眠りけん。目を開きし時は、寝て居るくゝとて、稚兒が笑ひ興じ居たりき。稚兒は昨夜早く眠りて、今朝になりて始めて余等の屋上に臥したることを知りたるなり。屋上露臥の味を覺えたりけん。翌夜三男は長男・次男・義甥ギセイと共に、再び屋上に眠りたりき。避暑を嘲りながら屋上に避暑す。人或は五十歩百歩と笑はんか(浴汗記)

九 蟬の蛻カマキリ

藤 森 秀 夫

藤森秀夫

詩人

自由詩

一、定形詩となり、

ニ、リズムが波をかくる存

フランス

川路柳軒

(一三三)

主たる所

一、化蟬と致し、離別要

ニ、蛻カマキリが何事

物、美、満、足

化蟬は自身を女王と感じた。

不、死、運、命

實際その目玉には

あらゆる美が反映した。

生きくゝとして若い蟬

其の戯れ、其の變化、

日光の虹の輝かしさ、

草の褥クシに生れ出た

蟬はかたびら、金の蟬。

若く美しき夏の朝、

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

自由詩

良、親、對、追、憶
C. 蟬、旅行、享、樂
夏の天地は今や彼のもの。

九 蟬の蛻

其の誇り立つ櫨も、
其の扇の様な楓シデの林も、
廣々とした蒲公英の野も、
すべて夏の廣大と光明と自由とが彼の物であつた。

若輩ニヤク誕生

彼は其の羽を伸して舞ひ立てばよいのだ。
すると其處に樂園があつて、

其の涼しい樹蔭ツキノから樹蔭へと

憩レひながら歌ひ歩けばよいのだ。

そして其の吸収する樹の汁は

人の世の苦痛を混へぬ（非常に長き命。酒神山不死の薬酒）ネクターネクターに相違なかつた。

ネクター
神酒又は甘
美の飲料と
譯す

β
彼は生れ出た歡喜の自覺と

生命の充實とにわなくと戦いた。

あゝしかし生命なき殘骸、

彼は傍の蛻を見返つて

涙と共に別離の言葉を投げた。

「お前。私の過去。愛の形見よ。

過去と共に其の様々な美や醜の記憶を盛る器よ、

其の器は破れた。

そして私が其の破れ目から這ひ出た。

今まで私であつたものも、

今は私でなくなつた。

そして私は眞にお前を棄てねばならぬ。

愛の形見よ。」

九蟬の蛻

蟬はかたびら、金の蟬は、
みんく、鳴いて飛去つた、
花の馨の高い栗の幹へ。
彼は更に小高い處を見附けて、
次第に好い眺望を發見した。

世界は次第に輪廓を増し、
新しく珍しき様は彼を飽かしめない。
彼は溢れるまゝに歌ひ續けた。
恵まれた享樂者。

あゝしかし、彼に見棄てられた蛻、

蛻は雨風に打たれて飛散した。
顧みられざる不幸者。

其の滅び行く歌は響いた。
私の一生は全く努力の一生、
而も光明に缺けてゐた。
かくて地中を這ひ廻つた。
眞に缺乏と貧困と苦痛との道程。
永遠に盲目の國を掘り、
望としては唯、一つ復活の望、
何時か新しき生命となつて
光明の中に生れ出たい――。

其の望が達せられ、

美の女王は生れた。

彼女の讚美歌は

夏の樂園に最もふさはしい。

美術家・詩人・青年に靈感を與へ、

働手に元氣と疲勞と安眠とを調劑し、

赤ん坊に小守唄を囁く。

眞に自然の伴奏者。

此の大藝術家の女王様、

それを私が生んだのだ。

身は土塊に歸り

雨や風に散つたとて、

何で口惜しいことがあらうぞ。(讀賣新聞)

10 二百十日

夏目漱石

夏目漱石

名は金之助

英文學者

小説家

大正五年歿

年五十

笹裕派(夏目)

ぶらりと兩手をさげた儘、圭さんがどこからか歸つて来る。

「何處へ行つたね。」

「一寸町を歩いて來た。」

「何か観るものがあるかい。」

「寺が一軒あつた。」

「それから。」

「銀杏の樹が一本門前にあつた。」

「それから。」

「銀杏の樹から本堂まで一町ばかり石が敷きつめてあつた。非常に細

長い寺だつた。」

「這入つて見たかい。」

「10 二百十日」

俳句の趣味
對證日本一
自然的
精畧敘

寺
銀杏屋

(憐れしやうの小寺の山)

豆腐屋と寒碧寺

俳句の趣味

對證日本一

自然的

精畧敘

ほくとむす

か日や中かじ

出かあたり

「やめて来た。」

「其の外に何もないかね。」

「別段何もない。一體、寺といふものは大概の村にあるね。君。」

「さうさ、人間の死ぬ處には必ずある筈ぢやないか。」

「成程さうだね。」

と圭さん、首を捻る。圭さんは時々妙な事に感心する。暫くして、捻つた首を真直にして、圭さんがかう云つた。

「それから鍛冶屋の前で、馬の蹄鐵を替へる所を見て来たが、實に巧なものだね。」

「どうも寺だけにしてはちと時間が長過ぎると思つた。馬の蹄鐵がそんなに珍しいかい。」

「珍しくなくても見たのさ。君、あれに使ふ道具が幾通りあると思ふ。幾通りあるかな。」

「あて、見給へ。」

「あてなくてもいゝから教へるさ。」

「何でも七つ許りある。」

「そんなにあるかい。何と何だい。」

「何と何だつて、槌にあるんだよ。第一爪をはがす鑿と、鑿を敲く槌と、それから爪を削る小刀と、爪を削る妙なもの、それから……」

「それから何があるかい。」

「それから變なものがまだ色々あるんだよ。第一馬のおとなしいには驚いた。あんなに削られても、刳られても、平氣で居るぜ。」

「爪だもの。人間だつて平氣で爪を剪るぢやないか。」

「人間はさうだが、馬だぜ、君。」

「馬だつて人間だつて爪に變りはないやね。君は餘つ程吞氣だよ。」

「吞氣だから見て居たのさ。然し、薄暗い處で赤い鐵を打つと綺麗だね。」

びち／＼火花が出る。」

「出るさ、東京の真中でも出る。」

「東京の真中でも出ることは出るが、感じが違ふよ。かう云ふ山の中の鍛冶屋は、第一、音から違ふ。そら、此處まで聞えるぜ。」

初秋の日脚はうそ寒く遠い國の方へ傾いて、淋しい山里の空氣が心細い夕暮を促すなかに、かあん／＼と鐵を打つ音がする。

「聞えるだらう。」

と圭さんがいふ。

「うん。」

と碌さんは答へたきり、默然として居る。隣の部屋で何だか二人、しきりに話をしてゐる。

「そこで其の相手が竹刀を落したんだあね。すると其のちよいと小手を取つたんだあね。」

「ふうん。たうとう小手を取られたのかい。」

「たうとう小手を取られただあね。ちよいと小手を取つたんだが、そこが、そら竹刀を落したものだから、どうにもかうにも仕様がないやあね。」

「ふうん。竹刀を落したのかい。」

「竹刀は、そらさつき落して仕舞つたあね。」

「竹刀を落して仕舞つて、小手を取られたら困るだらう。」

「困らあね。竹刀も小手も取られたんだから。」

二人の話は何處までも竹刀と小手で持ちきつて居る。默然として對坐してゐた圭さんと碌さんは、顔を見合はしてにやりと笑つた。

かあん／＼と鐵を打つ音が靜かな村へ響き渡る。癩走つた上に何だか心細い。

「まだ馬の蹄鐵を打つてる。何だか寒いね、君。」

と圭さんは白浴衣の下で堅くなる。碌さんも同じく白地の單衣の襟を

搔合せて、だらしのない膝頭を行儀よく揃へる。やがて圭さんが云ふ。

「僕の子供の時住んでゐた町の真中に、一軒豆腐屋があつてね。」

「豆腐屋があつて？」

「豆腐屋があつて、其の豆腐屋の角から一町許り爪先あがりにあがると寒磬寺と云ふ御寺があつてね。」

「寒磬寺と云ふ御寺がある？」

「ある。今でもあるだらう。門前から見ると只大竹藪ばかり見えて、本堂も庫裏もない様だ。其の御寺で、毎朝四時頃になると誰だか鉦を敲く。」

「誰だか鉦を敲くつて、坊主が敲くんだらう。」

「坊主だか何だか分らない。唯竹の中でかんく」と幽かに敲くのさ。

冬の朝なんぞ霜が強く降つて、蒲團の中で世の中の寒さを一二寸の厚さに遮つて聞いてゐると、竹藪の中から、かんく」と響いて来る。誰が

敲くのだか分らない。僕は寺の前を通る度に、長い石登と、倒れかゝつた山門と、山門を埋め盡す程な大竹藪を見るのだが、一度も山門の中を覗いたことがない。唯竹藪の中で敲く鉦の音だけを聞いては、夜具の裏で海老の様になるのさ。」

「海老の様になるつて？」

「うん。海老の様になつて、口のうちで、かんく、かんく」と云ふのさ。」

「妙だね。」

「すると、門前の豆腐屋がきつと起きて、雨戸を明ける。ぎつくと豆を臼で挽く音がする。ざあくと豆腐の水を換へる音がする。」

「君の家は全體どこにある譯だね。」

「僕の家は、つまりそんな音が聞える處にあるのさ。」

「だから何處にある譯だね。」

「すぐ傍さ。」

「豆腐屋の向ふか、隣りかい。」

「なに二階さ。」

「どこの。」

「豆腐屋の二階さ。」

「へえ。そいつは……」

と碌さんは再び驚いた。

「それから垣根の朝顔が茶色に枯れて、引張るとがら／＼鳴る時分、白い靄が一面に降りて、町の外れの瓦斯燈に燈がちら／＼すると思ふと、又鉦が鳴る。かん／＼、竹の奥で冴えて鳴る。それから門前の豆腐屋が此の鉦を合圖に腰障子をはめる。」

「門前の豆腐屋と云ふが、それが君の家ぢやないか。」

「僕の家、即ち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。かん／＼といふ聲を聞きながら、僕は二階へあがつて蒲團を敷いて寝る。――僕のうちの吉原

揚は旨かつた。近所で評判だつた。」

隣の座敷の小手と竹刀は雙方ともおとなしくなつて、向ふの縁側では六十餘りの肥つた爺さんが、圓い脊を柱に持たせて胡坐の儘、毛抜で顎の髯を一本々に抜いてゐる。髯の根をうんと仰へてぐいと抜くと、毛抜は下へ弾ね返り、顎は上へ反り返る。まるで器械の様に見える。

「あれは幾日かゝつたら抜けるだらう。」

と碌さんが圭さんに質問をかける。

「一生懸命にやつたら半日位で済むだらう。」

「さうは行くまい。」

と碌さんが反対する。

「さうかな。ぢや一日かな。」

「一日や二日で綺麗に抜けるなら譯はない。」

「さうさ、ことによると一週間もかゝるかね。見給へ、あの丁寧に顎を撫

で廻しながら抜いてるのを。」

「あれぢや、古いのを抜いちはないうちに、新しいのが生えるかも知れないね。」

「兎に角痛いことだらう。」

と圭さんが話頭を轉じた。

「痛いには違ひないね。忠告してやらうか。」

「なんて」

「よせつてさ。」

「餘計なことだ。それより幾日か、つたら、みんな抜けるか訊いて見ようぢやないか。」

「うん、よからう。君が訊くんだよ。」

「僕はいやだ。君が訊くのさ。」

「訊いてもよいが、詰らないぢやないか。」

「だから、まあよさうよ。」

と圭さんは自己の申出しを惜しげもなく撤回した。

秋に成り初め

一度途切れた村鍛冶の音は、今日山里に立つ秋を、幾重の稻妻に碎くつもりか、かあんくと澄みきつた空の底に響き渡る。

「頻にかんくやるな。どうもあの音は寒磬寺の鉦に似てゐる。」

「妙に氣にかゝるんだね。其の寒磬寺の鉦と豆腐屋の倅と何か關係が

あるかい。全體君が豆腐屋の倅から今日までに變化した因縁は、どう

いふ筋道なんだい。少し話して聞かせないか。」

「聞かせてもいゝが、何だか寒いぢやないか。ちよいと夕飯前に温泉に

這入らう。君いやか。」

「うん、這入らう。」

圭さんと碌さんは手拭をぶら下げて庭へ降りる。棕櫚緒の貸下駄には都らしく宿の焼印が押してある。

「時に君、背中を流してくれないか。」

「僕のも流すかい。」

「流してもいゝさ。隣の部屋の男も流しくらをやつてたぜ、君。」

「隣の男の背中は似たり寄つたりだから公平だが、君の背中と僕の背中と大分面積が違ふから損だ。」

「そんな面倒な事を云ふなら一人で洗ふばかりだ。」

と圭さんは兩足を湯壺の中にうんと踏ん張つて、ぎうと手拭をしごいたと思つたら、兩端を握つた儘びしやりと音を立て、斜に膏ぎつた背中へ當てがつかつた。やがて二の腕へ力瘤が急に出来あがると、水を含んだ手拭は岡の様に肉づいた背中をぎう／＼こすり始める。

手拭の運動につれて、圭さんの太い眉がくしやりと寄つて来る。鼻の穴が三角形に膨脹して、小鼻が勃として左右に展開する。口は腹を切る時

の様に堅く喰縛つた儘兩耳の方まで裂けてくる。

「まるで仁王の様だね。仁王の行水だ。そんな猛烈な顔がよく出来る

ね。こりや不思議だ。さう眼をぐり／＼させなくつても、背中には洗へ

さうなものだね。」

圭さんは何にも云はずに一生懸命にぐい／＼こする。こすつては時々手拭を温泉に漬けて、十分水を含ませる。含ませるたんびに碌さんの顔へ、汗と膏と垢と温泉の交つたものが十五六滴づつ飛んで来る。

「こいつは降參だ。ちやつと失敬して流しの方へ出るよ。」

と碌さんは湯槽を飛出した。飛出しはしたものの、感心の極流しへ突立つた儘、茫然として仁王の行水を眺めて居る。

「あの隣の客は元來何者だらう。」

と圭さんが湯槽の中から質問する。

「隣の客どころぢやない。其の顔は不思議だよ。」

「もう済んだ。 あゝいゝ心持だ。」

と圭さんは手拭の一端を放すや否や、ざぶんと温泉の中へ、石の様に大きな背中を落す。 満槽の湯は一度に面喰つて、槽の底から大恐慌おどろを持上げる。 ざあつくと音がして流しへ溢れ出す。

「あゝいゝ心持だ。」

と圭さんは湯の中で云つた。

「成程さう遠慮なしに振舞つたら、好い心持に相違ない。 君は豪傑だよ。」

「時にあの竹刀と小手のことばかり云つてる隣の客は、ありや全體何者だい。」

と圭さんが思ひ出したやうに云ふ。 碌さんは、

「——そこで其の小手を取られたんだあね——。」

と答へる代りに隣の眞似をする。

「はゝゝゝ。 そこでそら竹刀を落したんだあねか。 はゝゝゝ。 どうも

氣樂なものだ。」

と圭さんも眞似して見る。

「なに、あれでも實は慷慨家あつちのまじき豪傑かも知れない。 そらよく草雙紙あかひつとにあるぢやないか。 何とかの何々、實は海賊の張本毛剃あつちの張本九右衛門あつちの九右衛門で。」

「海賊らしくもないぜ。 さつき温泉に這入りに來る時、覗いて見たら、二人とも木枕をしてぐらく寝てゐたよ。」

「木枕をして寝られる位の頭だから、そら、そこで、其の、小手を取られるんだあね。」

と碌さんは、まだ眞似をする。

「竹刀も取られるんだあねか。 はゝゝゝ。 何でも赤い表紙の本を胸の上へ載せたまんま寝て居たよ。」

「其の赤い本が、何でも其の竹刀を落したり、小手を取られるんだあね。」
と碌さんは、どこまでも眞似をする。

「何だらう、あの本は。」

「伊賀の水月さ。」

と碌さんは躊躇ちゆうちゆうもなく答へた。

伊賀の水月。伊賀の水月た何だい。」

「伊賀の水月を知らないのかい。」

「知らない。知らなければ恥かな。」

と圭さんは一寸首を捻つた。

「恥ぢやないが、話せないよ。」

「話せない。なぜ。」

「なぜつて、君、荒木又右衛門を知らないか。」

「うん、又右衛門か。」

「知つてるかい。」

と碌さん又湯の中へ這入る。圭さんは又槽の中へ突立つた。

度史敷馬
河合又右衛門

「もう仁王の行水は御免だよ。」

「もう大丈夫、背中は洗はない。餘り這入つてると逆上せるから、時々

う立つのさ。」

「唯立つばかりなら安心だ。それで、其の荒木又右衛門を知つて居る

かい。」

「又右衛門。さうさ、どこかで聞いた様だね。豊臣秀吉の家來ぢやない

か。」

と圭さん、飛んでもないことを云ふ。

「はゝゝゝ。こいつは呆れた。随分えらいことは云ふやうだが、どうも

何も知らないね。」

「ぢや待つた、少し考へるから。又右衛だね、又右衛、荒木又右衛門だね。

待ち給へよ、荒木の又右衛門と うん分つた。」

「何だい。」

「相撲取だ。」

「はゝゝゝ荒木、はゝゝゝ荒木又はゝゝゝ、又右衛門が相撲取。愈呆れて仕舞つた。實に無識だね。はゝゝゝ。」

と碌さんは大恐悦である。

「そんなに可笑しいか。」

「可笑しいつて、誰に聞かせたつて笑ふぜ。」

「そんなに有名な男か。」

「さうさ。荒木又右衛門ぢやないか。」

「だから僕もどこかで聞いた様に思ふのさ。」

「そら、落ち着く先は九州相良つて云ふぢやないか。」

「云ふかも知れんが、其の句は聞いたことがない様だ。」

「困つた男だな。」

「ちつとも困りやしない。荒木又右衛門位知らなくたつて、毫も僕の人

落ち着く先
近松半二の
伊賀越道中
雙六の沼津
の段にある
語

格には關係はしまい。それよりも五里の山路が苦になつて、やたらに不平を並べる様な人が困つた男なんだ。」

「腕力や脚力を持出されちや駄目だね。到底叶ひつこない。そこへ行くと、どうしても豆腐屋出身の天下だ。僕も豆腐屋へ年季奉公に住込んで置けばよかつた。」

「君は第一、平生から懦弱じやうじやくでいけない。ちつとも意志がない。」

「是で餘つ程あるつもりなんだがな。唯饅餡まんじうに逢つた時ばかりは全く意志が薄弱だと、自分ながら思ふね。」

「はゝゝゝ、詰らん事を云つてゐらあ。」

「然し豆腐屋にしちや、君のからだは綺麗過ぎるね。」

「こんなに黒くつてもかい。」

「黒い白いは別として、豆腐屋は大概刺青はりもがあるぢやないか。」
「なぜ。」

「なぜか知らないが、刺青があるもんだよ。君、なぜほらなかつた。」
「馬鹿あ云つてらあ。僕の様な高尚な男がそんな愚な眞似をするものか。僕にはそんなものは向かない。荒木又右衛門だつてほつちや居まい。」

「荒木又右衛門か。そいつは困つたな。まだそこまでは調べが届いて居ないからね。」

「そりやどうでもいゝが、兎も角も明朝は六時に起きるんだよ。」

「さうして兎も角も饅頭を食ふだらう。僕の意志の薄弱なものにも困るかも知れないが、君の意志の強固なものにも辟易するよ。うちを出てから僕の云ふことは一つも通らないんだからな。全く唯々諾々として命令に服してゐるんだ。豆腐屋主義は厳しいもんだね。」

「なに此の位強硬にしないと増長していけない。僕がかい。」

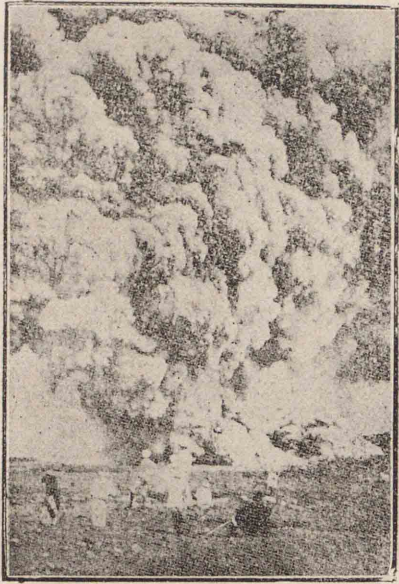
「なあに世の中の奴等がさ。」

「然しそりや見當違ひだぜ。そんな人の身代りに僕が豆腐屋主義に屈従するな堪らない。どうも驚いた。今後君と旅行するのは御免だ。」

「なあに構はんさ。」

「君は構はなくつても、こつちは大いに構ふんだよ。其の上旅費は綺麗に折半されるんだから愚の極だ。」

「然し僕のお蔭で天地の壯觀たる阿蘇の噴火口を見ることが出来るだらう。」



阿蘇山噴火口

「かはいさうに。一人だつて阿蘇位登れるよ。時にあの髯を抜いた爺さんが、手拭をさげてやつて來たぜ。」

「丁度よいから君一つ聞いて見給へ。」

「僕はもう湯氣で逆上せさうだから、出るよ。」

「まあいゝさ、出ないでも。君がいやなら僕が聞いて見るから、もう少し這入つて居たまへ。」

「おや後から竹刀と小手が一緒に來たぜ。」

「どれ。成程揃つて來た。あとからまだ來るぜ。やあ婆さんが來た。」

婆さんも此の湯槽へ這入るのかな。」

「僕は兎も角も出よう。」

「婆さんが這入るなら、僕も兎も角も出よう。」

風呂場を出ると、ひやりと吹く秋風が、袖口からすうと這入つて、素肌を腹

の方へ吹抜けた。圭さんは、はつくしようと大きな嚏を無遠慮にやる。

あがり口に白芙蓉が五六輪、夕暮の秋を淋しく咲いて居る。見上げる向

ふでは阿蘇の山がごうくくと遠くながら鳴つて居る。

「あすこへ登るんだね。」

と碌さんが云ふ。

「鳴つてるぜ。愉快だな。」

と圭さんが云ふ。

(漱石全集)

一一 飛入りの力者

正岡子規

正岡子規
名は常規
俳人
歌人
明治三十五年歿

飛入の力者怪しき角力かな。

秋のはじめつ方、毎夜村の若衆ども打寄りて、辻角力を催すに、力自慢の誰
おのづから集りて、假初ながら大關關脇と氣取りて、威張りに威張りつ
面白き夜を篝火のそばにぞふかしける。

さる程に、或夜のこと、今までは見訓れぬ一人の男の、つと此の角力場に來

一一 飛入りの力者

りて、我も力競べんといふ。男盛りの若者ども血氣にはやりて、これ式の男、何程の事かあらん。」といきなり取つてかゝれば、無雑作にぞ投げられける。次なるが敵討たんと組みつけば、これも物の見事に投げられけり。其の外幾人となく取つてかゝる者、皆この有様なれば、終には大關と人も許し我も任ずる某自ら大勢の恥を雪がんとて、のさりくくと歩み出づ。皆々、この勝負こそは、と固唾を吞んで眺め居れば、二人はやがて立上り、えいと組み、おゝと引き、左をさし、右をはづし、暫し押合ひ揉合ひしたりけるが、如何したりけん、彼の男のつと寄るよと見えしまゝに、流石の大關も難なく土俵の真中へ叩きつけられぬ。並み居たる見物はあつけにとられたり。

やがて様々の評判こそ口より口へさゝやかれけれ。さるにても彼の飛入りの男は誰ならん。此の村にも見馴れぬ顔の男なり。北村の人に聞けども、北村の人も知らず。南村の人に聞けども、南村の人も知らず。さ

大關 大将
南 脇 副将
結 三将

最手 大関
奥所 鎌倉権五郎

りとして本場を踏める關角力といふ風采にもあらねば、通りがかりの武者修業といふ打扮にもあらざりけり。

かくて疑惑は疑惑を生み、私語は愈かしくなりぬ。中に一人の年寄りたる行司のしはぶきして小聲にて言ふやう、皆の衆、靜かにせよ。彼こそは彼處の山に住めるといふ天狗様にこそはあらめ。今宵の振舞を見るに、たゞ人とは覺えず。思ふに我等が力わざに耽りていと誇り顔なるを、かたはら痛しとて、斯くは懲しめ給ひたるものにてあるらん。」と言へば、皆々顔見合はせて襟元寒しと身ぶるひなどすめり。(俳諧大要)

新保磐次
文章家
著術家
安政三年生
七月三日
堀河天皇寛
治元年(一七
四七)
金澤柵
今の羽後國
仙北郡金澤
町にあつた
横手驛の北
二里餘

一二 鎌倉権五郎

新保 磐次

かくて七月三日、義家諸軍を率ゐて仙北の金澤柵に到着して武衛家衡等

一二 鎌倉権五郎

雲を攻勢
防多字勢
大夫
職(長官)
皇恩

權(三)前

頭(カミ)古名馬
強弓
其儘(そのまま)林(こやし)假(かり)定(ぢやう)儀(ぎ)
若(わか)かりしは

天刃
柔軟



を圍む。兩軍の関の聲山岳を動かし、晝夜の合戦止むことなし。寄手の先陣秩父十郎を始め功名勇戦様々なりし中に、殊に勇ましかりしは鎌倉權五郎景正なり。景正は權大夫景道が甥にして、權頭景成が一子、生年茲に十六歳、心剛に質柔和、力量馬術弓矢、打物の雙刀劍を同じふ術びなき達人にして、毎度大軍の先を蒐あつけ、敵を殺すこと數を知らず。武衡が兵に鳥海彌三郎といふ強弓の手垂あり。景正が働を見て此の若者を其の儘置かば悪しかりなるとこそ覺えたれ。其處引き給ふな答の矢を進まらせん。と眼に矢を立てたるまゝ、弓に矢を番へて引絞る。彌三郎大いに驚き、今まで吾が鏃に懸る人の物言うたる例なし。是、凡人に非ず。と身の毛豎たちて畏おそしく逸足出

て逃げけるを、景正いづこまでもと追懸けて、此處を回り、彼處を潜り、遂に追付き、丁と射る。其の矢鳥海が背より胸へ射貫きて、鏃五六寸出でければ、怖おそへず馬より堂と落つるを、郎黨馳寄つて首を取る。

景正は陣屋に歸り、景正手負ひたり、此の矢抜いてたべ。とて仰むけに臥す。豫て親しき三浦平太郎爲次、いで抜きて進らせん。とて片手に景正が額を押へて片手にて抜かんとすれど、強弓の精兵が射たる矢なれば、容易く抜けざりければ、爲次は片足にて景正が額を踏まへ、左右の手にて抜かんとしける時、景正臥しながら刀を抜いて爲次を刺さんとす。爲次驚きて、こは如何に。と問へば、景正曰く、弓矢に當りて死するは恥に非ず。いかで生きながら頬を踏まれんや。と。爲次即ち膝を屈めて顔を押し、やうく其の矢をぞ抜きたりける。景正が剛氣壯膽實に空前絶後といふべし。

(趣味の日本史)

三浦修吾
教育家

文學者

大正九年歿

年四十五

ロンバルヂ

ヤ

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

山の南

伊太利の北

部アルプス

一三 少年斥候

三 浦 修 吾

千八百五十九年、ロンバルヂヤを救はんが爲に、佛伊兩國の聯合軍が奥太利と戦つて、幾度か之を破つた。其の折の事であつた、六月の或晴れたる朝、伊國騎兵の一隊が間道に沿うて敵を偵察しつゝ、徐々に進行して居た。その一隊は一士官と一軍曹とによつて指揮され、何れも口を緘シヤグんで前方を見張り、敵の前衛の白い姿が今にも見えはしないかと少しも瞳を離さない。斯くしてこの一隊は木立に包まれた一軒の田舎家の前に達した。そこに十二歳許りに見える一少年が立つて居て、小刀で樹の枝を切つて杖を拵へて居た。家の窓には大きな三色旗が飄つて居るが、人は誰も居ない。家族は敵兵を恐れて國旗を掲げておいて、とうに遁げたのである。少年は騎兵の近づくを認めて、杖を投棄して、帽子を舉げた。眼の大きい元氣の好さうな顔の綺麗な子で、上着を脱いで胸を露して居た。

「何をして居るんだ。」と士官は馬を停めて聲をかけた。「なぜ家族と一緒に逃げないのだ。」

「僕は家族はありません。孤兒です。人の仕事など少々して居ますが、今は戦争を見たくて残つて居るんです。」と答へた。

「奥國兵を見たか。」

「いえ、この三日間は見ません。」

士官は暫く考へて馬を下り、兵士等に命じて前の方に注意させ、自分は一入その家の屋根に上つた。けれど家が低いので餘り遠くは見えない。士官は「樹に上らなくてはだめだ。」と云つて下りて來た。丁度家の前に一本の高い樹が空に梢を動かして居る。士官は暫く考へて、樹の梢と兵士の顔とを見比べて居たが、突然かの少年に向つて、

「おい小僧。貴様眼がよく見えるかい。」

「眼ですか。一哩先の雀の子でも見えます。」

「此の樹の梢に上れるかい。」

「此の樹の梢に。私がですか。それこそ半分間もかゝりはしません。」

「それぢや貴様これに登つて向ふに敵兵が居るか、煙や銃劍の光や馬な

ど見えるか、見てくれるか。」

「やりませう。」

「いくらやらうか。」

國家精神の表

「金がいくら要るかと仰しやるんですか。要りません。愉快です。敵

の爲だつたら、どうしたつてやりはしません、が國の爲ですもの。僕も

ロンバルヂヤ人です。」

少年は笑つてかう答へた。

「よし上れ。」

「一寸待つて下さい。靴を脱ぎますから。」

少年は靴を脱ぎ、帯をひきしめ、帽子を草の上に投げて、幹に抱きついた。

「危いぞ。」士官ははつとして彼を止めようとして聲を立てた。少年は美しい碧い眼でふり返つて見て、何事かと尋ねる様な風。

「何でもない。上れ。」

少年は猫の様にすく／＼と登つた。

「前方に氣をつけろ。」と士官は兵士等に聲をかけた。少年は間もなく樹の梢に上つた。幹に絡みついて居た足は樹の葉に隠れて見えなけれど、身體は遠くからも見える。ふさ／＼とした髪に日光が當つて黄金色に輝いて居る。木が高いので、下から見ると少年の身體が小さく見える。眞直に前の方を見る。と士官が聲をかけた。少年は右の手を樹からはづして、眼の上にかざして見た。

「何が見える。」と士官が問ふ。

少年は下を向いて、手で口喇叭をこしらへて答へた。

「馬に乗つた人が、二人道に立つて居ます。」

「距離はいくら。」

「半哩。」

「動いて居るか。」

「じつと立つて居ます。」

「まだ外に何か見えるか。右の方を見る。」

少年は右の方を眺めて、

「墓地の近くに樹の間に、何か光つたものが見えます。銃剣でせう。」

「人は見えぬか。」

「見えません。穀物の中に隠れて居るでせう。」

此の時、びゆうつといふ音がして銃丸が空をかすめて通つた。家の後ろの方へ消えて行つた。

「下りて来い。敵に見つかつたんだ。もう宜しい。下りて来い。」
と士官が叫んだ。

「怖かあ無いです。」と少年は答へる。

「下りて来い。」士官は又叫んで「左の方には何か見えぬか。」

「左の方。」

「うん、左の方だ。」

少年は左方に頭を轉じた。此の時、前よりはもつと鋭い音がもつと低く空を切つた。少年はぎよつとして「こん畜生。己を狙つて居やがる。」と思はず叫んだ。銃丸は少年の身體を掠めるやうにして通つた。

「下りろ。」士官は苛立つて叫んだ。

「すぐ下りますけれど、樹の蔭になるから大丈夫です。左の方を見るんでせう。」

「うん、左の方だが、もう下りて来い。」

少年は體を左の方に突き出して、大きい聲で「左の方の寺のある處に……。」
又一つ鋭い響が空を切つて通つた。忽ち少年は下りて来る様に見えた

が暫く樹の幹に取りついて居ると思ふ間に突然腕をひろげて眞逆様に落ちて來た。

「しまった。」士官は駈けよりながら絶叫した。

少年は仰向に地に横たはり、兩手をのばして斃れた。軍曹と二人の兵士とが馬を飛下りて來た。士官は少年の上に俯いて、其のシャツを披いて見ると、銃丸が左の肺に打込んで居た。「もうだめだ。」と士官は嘆息した。

「否、まだ息があります。」と軍曹がいふ。

「あゝかはいさうな事をした。感心な子だ。おい、しつかりしろ。しつかりしろ。」

と言つて、士官は手巾で創口を抑へた。少年は兩眼をぎろりとまはして、首を後ろに落した。もう死んだのだ。士官は顔色青ざめて、暫く少年を見て居たが、やがて草の上に、少年の上衣を敷いて、死體を靜かに其の上に載せた。そして立ち上つた。軍曹と二人の兵も之を見つめて動かずに

立つて居た。他の兵は敵の方をうちまもつて居た。

「かはいさうに。この健氣な少年を。」と士官は線りかへして俄に思ひつ

いて、家の窓から三色旗を取下して、柩衣の代りにこれを死體の上にか

けた。軍曹は少年の靴帽子、杖、ナイフなどを集めてその傍に置いた。彼等

は暫く無言のまま立つて居たが、やゝあつて、士官は軍曹に向つて、擔架を

よこさう。この子は軍人として死んだのだから、軍人に葬らするがよい。

と云ひ終つて、少年の死骸に向つて手を以て接吻を送り、直に兵士に向つて、乗馬と叫んだ。一令の下に皆馬に飛乗り、前進を續けた。それから數

時間の後に、次の如くこの少年は軍隊の敬禮を受ける事になつた。

日没の頃、伊太利軍前衛の全線が敵に向つて行進を起した。數日前サンマルチノの丘陵を花々しく血に染めた一大隊の射撃兵が、今朝騎兵の通行した田舎道を二列になつて進んだ。少年戦死の報知は出發前既に全隊に傳はつて居たのだ。今一隊の進んで來た通路はかの民家から數歩

の距離にあつた。先頭の將校の下に三色旗もて蔽はれて横たはれる少年を認めて皆劍を捧げて敬禮を表して通つた。一人の將校は小川の岸に屈んで、そこに咲き満ちて居る草花を摘み取つて、之を少年の死骸の上に撒いた。之に倣つて全隊の兵士が皆花を摘んで屍の上に投げたので、少年は程なく花に包まれてしまつた。そして將校も兵卒も皆口々に「偉いぞ、ロンバルヂヤの少年。」「さらば我が友。」「金髮君萬歳」などといふ。一人の將校は自分のかけて居る勳章を投げてやつた。今一人は行つてその額に接吻した。草花は猶續いて、あらはなる足の上に、血ににじんだ胸の上に、黄金色の頭髮の上に、雨の様にふり注いだ。かくて少年は叢の上に旗に包まれて横たはり、笑むが如き白い顔を見せて居た。かはいさうに、人々の挨拶をきいて、國の爲に命を捨てた事を満足に思つて居る様に見えた。(愛の學校)

五十嵐力

國文學者
早稻田大學
教授
明治七年生

一四 鳥島漂流ものがたり

五十嵐 力

見渡せば目も届かぬほどの廣野、その隅から隅まで一面に眞白な大鳥が並んで居て、足の踏みどころも無い。其の夥しい鳥の間をかき分けかき分け通り行く數人の男がある。髪は亂れ、顔は青ざめ、目はくぼみ、頬はこけて、憔悴果てた様子。はぐれぬ様に「ほうい〜」と呼びかはしながら、南へ南へと進んで行く。鳥の大きさは片翼をひろげたゞけて凡そ七八尺もあらう。人を怖るゝ氣色は少しもなく、押しにくればさつと開くが、やがて返つて來て前後に集る。譬へば鳥の翼の漫々たる波の間を、七八個の頭顱が泳いで居るやうに見える。一行はしばらくして廣野を行きつくして南の端の崖へ出た。向ふを望むと、遙かの磯邊に、人の姿が唯一つちら〜と見える。氣をつけて見た

一四 鳥島漂流ものがたり

急いで陸へあがらうと、帆を押し張つて暫時の間に磯邊に近づいた。丁度正午時分のことであつた。さて島の西の前沖に碇をおろして、島の様子を見ると、沖の中の離れ小島と覺しくて人家も見えぬ。一同顔見合はせて躊躇したが、本船はもはや水船になつて居る。其の上、水も米も缺乏して來た。是非がない、上陸しようかと相談して居るうち、山おろしが激しく吹廻して碇綱がすりきれ、危く吹流されようとしたところを、手早く舢ハシをおろし、鍋釜着替など、あらまし取込んで乗り移り、本船より離れて辛うじて島に着いた。丁度天明八年の正月晦日の事である。

久しぶりで地を踏んだ嬉しさは言葉に盡されぬ。が氣にかゝるは舢の始末である。故里へ歸る一縷の望は、繋つて此の一葉の小舟にある。何とかして丈夫に繋いで置かうと思つたが、荒磯アソの岸がことの外高いので繋ぐべき恰好の場所がない。止むを得ず上陸した處に繋いで、さて住所はと搜すと、磯の岩の下かげに、少しばかり雨をよけ得る處がある。差當

り幸ひと、これを當座の住所に定め、夕飯には粥を拵へ、打寄つて久しぶりで落ちついた食事をした。夜に入つてからは、此の數日間の艱難辛苦の話、行末の心細い話に涙を灑ぎ、積日の草臥クサヒにたわいもなく寢入つてしまつた。

明くる日は又しても大あらしになつた。一同早起きして舢を見廻り、念入りに繋ぎ直して、それから泉があるかと尋ね廻つたが、一向に見つからぬ。是非なく石の穴にたまつた水を取集めて飲水にし、米も少くなつたので、貝類を採つて補ふことにした。さて其の翌朝の事、西風の強く吹くのに驚かされて舢を見まはると、綱が摩り切れて舟が見えなくなつて居る。皆々手足をもぎ取られた思ひして驚き悔んだけれども、仕方がない。絶望の色は忽ち一同の顔にあらはれた。此の上は、此の島に永住の覺悟をせねばならぬと思ふにつけても、故郷の事などが頻に思ひ出されて生きながらへた心もなく、茫然として何事も手に着かぬ。其の中に飯米は

ますく、乏しくなる、之を補ふために濱邊をかけ廻つて磯貝を取つたが、上手の方に道らしいものを見つけて段々登つて行く中に、岩の下かけて、古拾一枚、釣竿一本、草履一足を見出した。さては此の島にも人が住むかと寄り集うて驚き喜ぶ。たゞ其の草履が日本の藁ではなく、見馴れぬ草で作つてあるので不安心にも思つたが、とにかく人が居るに相違あるまゝ。人といへば仇かたき山賊海賊でも戀しい。我等が辛苦も話したい、此の島の生活法も聞きたい。すぐにも此の道を辿つて出かけようと逸る者もあつたが、もはや夕暮、明日こそと、其の日は例の岩屋に歸り、翌日は早朝より握飯を拵へ、前の道を慕うて上へくと進んだ。險阻な岩陰の焼石を踏んでしばらく上ると、茅薄芒々と生ひ茂つて歩くべき隙もない處へ出た。いろくくと工夫して、押し分けく通り行くこと暫くにして、忽ちからりと開けた處が、大鳥の隙間なく一面に並んで居た前の廣野であつたので。

大阪船の舟子等は、搔いつまんでの閱歷を話して、ほつと息をついた。

三

話しかけられた男は、土佐の國の船頭、名を長平というて、三年前の天明五年二月、他の水夫三人と共に、此の島に流れ着いた者である。流れ着いて、命は首尾よく助かつたが、火道具を持ちあはさず、生魚、生鳥を食つたためか、俄に健康を害し、皆々腫病のやうになつて、乗組の三人はわづか二十日足らずの中に引きつゝいて命を殞し、長平唯一人、やうく今日までながらへたといふ。見れば面色は青く、眼は赤く、三年が間月代を剃らねば、誠に此の世の人とも思はれぬ。一同はあはれに思つて、携へて來た握飯を一つ取出して與へた。長平は夢かと喜んですぐに口にしたが、忽ち吐き出して、勿體ない事ながら、平生生鳥を食ひ馴れた爲か、戴かれぬ。と云つて、餘りを返した。

なほ長平の話を知くと、此の島には穀類がない。常食としては第一に前

嶺 應 性

の大鳥、次には魚貝を用ひる。但し大鳥は夏の百日ばかりの間、悉く何處へか行つてしまふ故、冬の間一人前百羽程ほし上げて、夏の食料に蓄へておかねばならぬ。「各方も只今から其の用意にかゝらねばなりません」と云ふ。一同は吸込まるゝやうに耳を傾けた。

「疲れた身に立ち話も御苦しからう。此處よりは、むさけれど我が宅へ」と、長平は先に立つて案内した。無論見る影もない小屋である。火が無いので殊に淋しい。室の隅に大鳥の卵を四五十立てならべて、其の中に水を貯へてあつたが、一個に三四合は入る。それを一個づゝ茶の代りにとすゝめた。さて其の夜は長平の小屋で語りあかし、それより互に一家の如く心易くして、火にかけた鳥の料理に舌鼓を打ちつゝ十日ばかり逗留したが、大阪舟子の住居の方が、水や其の他の便宜がよいといふに相談がまとまり、一同長平を伴つてもとの場所に立ち歸つた。

四

同胞を見出す、生活法を覺える、不幸の中にもどうやら氣が落ちついて來た。それにつけても、まづ必要を感じるのは住所である。此の上は、小屋がけなりともして雨露を凌がうと、早速然るべき岩穴を見立て、土を運び、地をならし、茅を刈寄せて、粗末ながら人間の住居らしいものが出來あがつた。其のうち、鳥捕りは馴れる、魚とりも巧になる、日々の生活にもいくらか餘裕が出て來る、従つて退屈もする、遊び楽しみもしたくなる。かくして遂に島の内見物の相談が出て、四五人づゝ打連れ立ち、茅薄をわけ、大鳥の群をわけ、岩を攀ぢ、險阻を冒して、到らぬ隈なく探らうといふことになつた。

島の周圍は凡そ三里、直徑は一里ばかりもあらう。段々と探るにつれて、此の無人島にわびしい生活をした者の自分等だけではないことがわかつた。雨風を避け易い處、或は濱邊の洞窟などには、往々人の往んだらしい跡がある。或は風よけの石垣を築いた處がある。或は作物を仕つけ

たらしい處がある。ある洞穴の中には、鍋釜を始め世帯道具の腐れたのが、半ば土に埋れてあり、三尺ばかりの朽ちかけた板には、南部行の遠州船が元文三年正月漂着したといふ趣の文字があつた。或穴の中には、幡・天蓋・珠數などを入れた櫃があり、其の傍に枕をしたまゝ横たはつて居る白骨があつた。見るにつけて吾々がつひの運命も此の通りかと、人事ならずあはれを催し、石塔を建て、心ばかりの供養をした。

悲しい中にも多少面白いことが無いではない。處も隔り、氣候もかはれば、鳥獸・蟲魚・草木などにも、それ〴〵珍しいものがある。煙草の無いのに困つた揚句、やう〴〵「まゝやくな」といふ草を捜しあて、吸うた嬉しさ、ぶらといふ魚の皮で三味線を張つた時の喜ばしさ、大鮫の磯近く來て龜を呑み大鳥を呑む恐しさ、鴨に似て色の黒い鳥が夜明を知らせる珍しさ、内地の品物の流れ寄る懐かしさ、三年後に胡麻・小豆・唐がらしを得たうれしさなど、心ゆく事もいろ〴〵あつたが最も無聊を慰めたのは例の大鳥である。

ある。

鳥は鶴よりはよほど大きく、片羽根をのばしたゞけて七八尺はある。飛ぶ時に足を伸ばした所は尾のやうに見える。色は大體白いが、少し黒みのさした處もある。九月頃此の島へ渡つて、土用に卵を生み、牝牡の親鳥二羽十四五日づゝかはる〴〵温める。霜月の末に鳥になる、其の時は色が黒い。それより五月の末迄は親鳥が魚や貝や炭や竹の根などをくはへて來て、初めの中は腹の中で水にして口移しに與へるが、後には物の儘でよい程に切つて口移しにくれる。その口移しのしやうが面白い。親鳥の嘴の横に、口を閉めても合はぬ透間がある。子鳥は其處へ嘴のさきを入れて物を食ふ。此の鳥が巢を作る時は、激しく場所を争ひ、互に喰ひついて一日も二日も離れず、遂には雙方血まみれになることがしばしばある。巢の作り方は、土を三尺程掘つて、藁を入れ、土をかけ、其の中へ卵を二つ産みおとして温める。卵を取つて、かはりに石を入れて置けば、それ

を何時までも温めて居る。此の鳥の卵はかうして取つて食物にするので、又鳥を捕るには巢鳥の外へ出る所を窺ひ、まはり四五寸の長い棒で首筋を打てば、そのまゝ死んで了ふ。打ちそこなつて喰ひつかれると、あとが大分痛むけれども、其の鳥の臑アッスをつけておけばやがて癒る。最も見事なのは此の鳥の島を立ち退く時で、五月の末になると、島中の大鳥が打揃ひ、千鳥のやうに濱邊へ行つて一夜を過し、翌日になつて、羽うちかはしつゝ残らず立ち退く。其の時は海も空も一面に鳥ばかりになつてしまふ。又此の大鳥が時々二羽向きあうて嘴を鳴らし、羽根を伸し、頭を下げ、前へ進み、後へ退き、聲をあげつゝくるり／＼と廻つて居ることがある。他の鳥もこれを見ると、一緒になつて、三四羽づゝ組をなして踊りさわぐ。全く鳥の舞踏でも見るやうで、その見物に隙を費すことも屢であつた。

五

旅は道づれともいふ。無人島に居て戀しきは人待たるゝは船である。

彼等は明けても暮れても海面を望む。「船が来ないか、見えないか」といふ詞が、一日にいくたび繰返されたか知れぬ。漂着した翌年、一艘の船が島近く現れた。一同は夢かと思はかり喜んで早速火を揚げて助けを求めたが、船は五六日島のまはりをめぐつて遂に何處ともなく去つて了つた。かくて、はかなく月日を送つて三年目の正月の或日、島から六里ばかり隔つた沖中に一艘の本船が見えた。段々近く寄つて碇をおろし、舩にうつつて漕ぎよせて来たが、岸邊に立つた一同を見て躊躇して居る。鳥の羽を着た異形の姿に恐れたのであらう。かれこれする中、高浪に揺られてあわたゞしく磯邊へ漕ぎ入つて来た。乗組六人、薩州船が日向灘で暴風に遭うて漂流したのであつた。此の船人の話によつて、始めて、此の日が寛政二年正月晦日であることがわかつた。

友が殖える、舩が手に入る。枯木の春に逢うた心地、歸郷の望がまたく芽をふいて来た。今度こそ舩を波にとられぬやうにと、念入りに丈夫に

繋いで、さて新來の珍客を住家に導いて休ませ、翌朝波が靜かになつてから、その舟を引上げようと楽しんで居たが、其の夜荒磯に打附けて破れてしまつた。掌中の寶は又も奪はれて、若しやの頼もあだとなつた。何といふ拙い運命であらう。

薩摩船の漂着によつて幸福を増したのは、硯筆・墨・鑿・鋸・斧・金槌・其の外の小道具の殖えたことである。鍋釜も殖えた。剃刀も此の時手に入つて各、俄に器量を上げた。唯一つ困つたのは蚊の新に輸入されたことであつた。

薩摩船の舟子が來てから、一つ穴の住居も狭くなつたので、二人三人づゝ別々の穴に住まふことにした。かくて數個の小家族が成り立ち、吉凶音問の慰めなども出て來て、小さいながら一つの郷黨を見るやうになつたが、世の果敢なさは此處も同じく、一つには食物の惡いため、二つには氣を痛めたためであらう、病死する者がおひ／＼に出て來た。有り餘る人の

中でも死別はつらい。況してこれは總勢やうやく十八人の孤島生活、一人だにあるを、僅の間に四人まで喪つた一同の悲嘆は言葉に盡されぬ。中でも人々に力を落させたのは荒濱生れの忠八といふ舟子の死亡したことであつた。此の男は賑やかな質で、歌も歌ふ、三味も弾く、常に絶望仲間の慰め手として、一同の氣を引き立て、居つたが、此の男が死んでからは、酒もなく、見る物もなく、^{死にぞは}女子供も居らぬ無人島が、火の消えたやうに淋しくなつた。死ぬ者は、皆、臨終には、死後には形を隠してくれよ、後世を弔うてくれよと懇に頼む。残る者もこれがやがて自分等の運命かと、いふにははれぬ心細さである。仲間のうちで、薩州船の男は氣の利いた男で、死人には一々戒名をつけ、髮剃をしてやつた。其の後一々火葬にして骨を取置き、塚の印に石塔を建てた。その序に前代からの死亡者にも、悉く石塔を建て、やつた。

彼等の夢寢にも忘れぬは故郷の事である。昔語に雁の音づれといふこ

（故事）
難勤武女好使
雁心（手紙）

ともあるものを、何がな吾等の有様を故郷人に知らせる工夫はあるまいかと考へたが、或時例の大鳥の中に、首に繩をかけたのを見出した。これ屈竟くつせいと、早速木札を百枚ほど造り、漂着の次第を書いて鳥につけて放したが、翌年になつて一羽も歸つて來ぬ。又鳥の中に釣針を呑んで居るものもあつたが、悲しいことには、それが日本の釣針ではない。思ふ事、試みる事悉く失敗して、しみくくと世の味氣あじわいなさを覺る。それにつけても罪深く感ずるのは日毎に多くの鳥を捕ることである。食物が無いから止むを得ぬとはいふものゝ、かやうな殺生をせねばならぬといふのも前世の因縁でがなあらう。一人一日一羽づゝなれば、一日には十四五羽を殺す、一年には五六千羽、十年積もれば五六萬羽、この鳥の思ひだけでも、ろくな往生は遂げられまい。萬一故郷に歸ることもあらば、鳥類は決して食ふまいと、神佛に願を立て、珠數を拵へて時々念佛を唱へ、精進日を選び、其の日は一日鳥を食ふことを休んだ。かやうな間に、秋になつて

も鳥の渡らぬことなどがあるといよく、殺生の報いであらう、是からは何を以て露命をつながうなどと心を痛める。其の時に新鳥の渡つて來たのを見る嬉しさ。かくて心ならずも、罪と知りつゝ、殺生を事として居る間に、或日、日蓮宗の御札が流れ寄つた。一同はこれを見て、法華經(五の)を事盲龜が浮木一羽、龜、浮木を得たやうに喜び、皆々法華宗の信徒になり、札の流れよつた處に堂を建て、厚く供養した。

六

大阪船の舟子に三之助といふ若者が居つた。手の利いた男で、或時寄り木を集め、斧一挺の細工に長さ三尋程の釣船を造つたが、これが種となつて本國歸航の一船を造る計畫が企てられた。

「十年このかた待てども、便船たよりのたつきが無い、あてにならぬことをあてにして此の島に朽ち果てるよりは、寧ろ吾等の手に成るかぎりの大船を造つて、本國へ歸る工夫をしてはどうか。」一人がいふと、叶はぬ迄もと

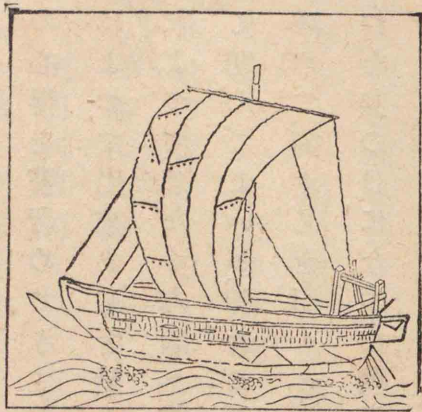
皆々熱心に賛成した。それから木寄せに取りかゝつて四方の浦々から寄り木を北湊へかつぎよせた。僅の小さな鋸で之を挽き割るのは容易な事でない。久しい間非常な勞力を費して、板はやうやく挽いたが、困つたのは、ふいごや鍛冶道具の無い事である。しかしこれがなければ、もはや何事も出来ぬ。皆々一生懸命に工夫した結果、遂に大鳥の羽を革の代りに用ひて鞆フイゴを造つた。次に平な石を金敷にし、斧ノコギリをたがねタガネにして、あまし道具を整へることが出来た。

これよりはいよゝ船の仕組である。得手により仕事を分擔して無駄骨を折らぬやうにせねばならぬ。まづ、船大工には三之助を棟梁として若手を付け、食物掛には老人を使ふ事にした。其の他の面々は八方に奔走して材料を集めたが、一から十まで流れ寄つた品物を集めること故、容易に揃ひやうがない。釘があれば木がなし、木があれば釘がない。無い時はいつも神慮に任せて一心に祈念したが、不思議にも必ず得物がある。

或時の如きは、釘が盡きて如何ともしやうがない。一同仕事を休み首を鳩めて相談したが、思案にあぐんで、御祈をした後に、濱邊へ行くと、丁度汐干のころであつたが、遙かの沖の石の間に、何やら妙な形物が見える。

怪しんで石を除けて掘り出して見ると古碇であつた。これで十分に釘を拵へて、しきりに工事を急いだ。かくて着手のそもゝから三年目にやうやく八分通り出来あがつた。

舟の形は凡そ出来あがつたが、その上に必要な材料が數々ある。まづ板のはぎ目に詰めて水漏りを防ぐ巻わたもなけ



鳥島漂流の人造つた船

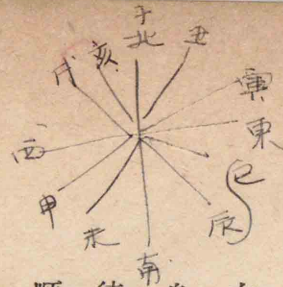
ればならぬ、帆も帆柱もなければならぬ。是等の材料をも苦心してやうやうに取り集めて造り上げた。さて又船を海までおろす道筋の堀割は

出入三年、三百人手間を費して、殆ど舟と同時に出来あがつた。かくて船の用意が全く整つたので、本國へ持ち歸る積荷を造り、死亡した仲間及び前に流れた人々の遺骨を箱詰にし、尙後々此の島に漂流する人の爲に、衣食住の心得を書留めて、さていよく出帆の準備をした。

神助によつて出来まじき船もめでたく出来あがつた。此の上尙神々の冥助によつて、恙なく本國へ歸らねばならぬ。ついでは何時何の方角へ向つて進んでよいか、神々の御示を請はうといふので、一同は精進を積み、身を淨めて、御くじを引くと、方角は戌亥の方、日取は六月八日と現れた。待兼ねた其の日になつて、朝早く起きて見ると、天道の恵にや南の方から順風がそよ／＼と吹いて居る。

七

時は寛政十年六月八日の朝、無人島の漂流者は順風に帆を揚げて島の北の港を出帆した。總勢十四人、土州赤岡浦船頭長平三十六歳、肥前堤川寺



江町船頭義三郎四十四歳、豆州須崎村久七五十三歳、江戸深川相川町清水屋吉藏三十五歳、雲州島根郡三保ヶ關清藏三十五歳、南部八之戸三之助二十九歳、大阪木津川幸町松兵衛四十一歳、加州石川郡大信浦長右衛門三十五歳、能登國鳳至郡磯尾村市之丞四十四歳、越後新潟志崎町由藏二十五歳、薩州志布浦船頭永右衛門五十五歳、同國八五郎三十九歳、日向赤江村甚右衛門五十八歳、同國重太郎五十二歳、そのうち此の島に十四年の月日を送つた者一人、十二年の者七人、八年の者六人、淋しいながら、住みてはさすがに別れの惜しまるゝ島を後にして、櫓拍子勇ましく漕出した。一同の相顧みる眼には、嬉しさ、悲しさ、有難さの涙が溢れて居る。

かくて九日には青ヶ島に着き、七月八日、公の船に送られて海路恙なく各、夢にのみ見た故郷の人となつた。(趣味の傳説)

一五 牛飼の歌

伊藤左千夫

牛飼の歌

牛飼が歌よむときに世のなかの新しき歌おほいにおこる。

一月五日年賀状に添へて

七人の子の親なれば何ごとも手まはりかねうとしとおもふな。

藤

龜井戸の藤もをはりと雨の日をからかささしてひ

若葉

蠶まだ二眠を過ぎず、村々のあをばわかばや人しづ

かなり。

森

夏やすみ家戀ひ來れば坂を出でて家の森見ゆ、わが家の森。

蕎麥

あしびきの岡邊の里の蕎麥畑に、夕けのけむりなびきたよふ。

田家秋

橋の人と馬あらふ人と楽しげに豊のみのりをあひ語るらし。

落葉

石にまとひ木の根にまとひ、落葉らはおのがまにまにたむろせる見ゆ。

一五 牛飼の歌

伊藤左千夫
歌人
大正二年
年五十

苦心苦学の

才実業を

二十才半記と下

根岸派

正岡子規

若葉

若葉

人情流露

詩調歌格

自然、写生歌

萬葉集

古今集

新古今集

追歌

蠶まだ二眠を過ぎず、村々のあをばわかばや人しづ

かなり。

森

夏やすみ家戀ひ來れば坂を出でて家の森見ゆ、わが家の森。

蕎麥

あしびきの岡邊の里の蕎麥畑に、夕けのけむりなびきたよふ。

田家秋

橋の人と馬あらふ人と楽しげに豊のみのりをあひ語るらし。

落葉

石にまとひ木の根にまとひ、落葉らはおのがまにまにたむろせる見ゆ。

一五 牛飼の歌

しぬ(人間の土)

憤

牛の兒にわが手をやれば、しが乳房すゝるさまにし
手をすゝるかも。
ホリに同じ。

兒

よき日には庭にゆさはり、雨の日は家とよもして兒
等が遊ぶも。
鞆たもと かろこ

兒

漬物に汗に事足る朝がれひ、不味まずしともせぬ兒らが
かなしも。
万屋朝屋

電車

さ夜ふけの雨のちまたに赤き灯を青き灯を振り、人
闇に立つ。
巷田江

一六 乃木大將と萬屋

九段の中坂
東京市麹町
區飯田町二
丁目
九段坂の北
に並んだ坂
四ノ宮堂
二序説一作者

九段の中坂に萬屋と云ふ酒屋あり、世の常ならぬ苦辛を積みて成功せる
老舗なり。乃木將軍の萬屋を知り、萬屋の將軍に知られたるは、眞まことに奇遇
と云ふべし。將軍は萬屋最良にて屢萬屋の由來を語られたりとぞ。海
北獨語に萬屋の事を記すこと詳なり。古人立志の強固なる、今人の及ぶ
所にあらず。左に記す所は嘗て將軍の稱揚を得たる獨語の全文なり。
之を將軍の堅志に對比せば、光輝を揚ぐるもの更に多からん。

二海北獨語の序
小宮屋の說明

江戸御城の北は、小川町番町とて、御旗本の屋敷ばかりある處なり。小川
町と番町との間に、少しばかりの町あり、東西三町南北二町あり。飯田町
と云ふ。南は田安と清水との間の御堀なり。御堀のはたを九段坂と云
ひ、其の北の筋を中坂と云ひ、其の北の筋をもちの木坂と云ふ。西は高く
三番町、東は低く小川町なり。此の飯田町は、武士屋敷の中に包まれてあ

一六 乃木大將と萬屋

池田人酒のちしほ
居川清きれこませは
字もあやかり

る故、商も多くある町なり。就中富をなせるは下の萬屋なり。間口十五
六間もある酒屋なり。江戸には造り酒屋一軒もなし、皆池田・伊丹・灘の清
酒なり。第二の家は上の萬屋なり。家居は大きくなければ、厚き身上
なり。端の萬屋と云ふは、格別の富豪にてはなけれども、上下の萬屋の本
家なり。下の萬屋は端の萬屋に奉公して番頭までに歴上りたる男なり。
上の萬屋は、端の萬屋の樽拾の丁稚なり。
さて端の萬屋の身上のよくなりたるは番頭の商上手にて、家内の治め方
より店の掟作法能く整ひて、皆々出精する故なり。一體此の番頭大いに
身持のよき男にて、費むだ遣ひなど一向にせぬなり。されども手代・丁稚
などは、随分寛やかに取育て、遂に叱りたる事なし。いつもく／＼にこや
かなる面なれども、手代・丁稚は甚だ畏れ敬ひて法を犯す者無かりしなり。
一日番頭主人の前に出で、云ふは、さて私は幼少より當御店をつとめ、御
取立てを蒙りて支配人にまでなりて幸に、御店も繁昌して、今は恥

しからぬ御身上になれり。私は年も長じたれば、小屋をも持ちて見たく
且は段々順に手代衆をも繰上げて、番頭を仰付けられねば、若者の勵にも
宜しからぬ故、私は此の節別家仰付けられ下さるべし。と云ふ。主人なる
ほど此方にも其の事を云ひて居ることなり。思立至極宜しかるべし。
且其の方より預りて居る金も、彼是六七十兩もあることなり。此方より
も少々褒美をも遣るべければ、百二三十兩にて家をも造作し、店をも心一
杯に立派に拵へ、然るべし。と云ふ。

番頭謹んで拜し云ふやう、私は左様なる餘分の金子一向に入用なし。只
今まで私の手前にて貯へたる金二十兩あり。これにて店を開き、商を始
め申すべし。さて私は外の商賣も存じ申さぬことなれば、やはり酒商賣
を仕るつもりなり。右につきては、當御店より荷をも御廻し下さるべし。
それにて私は十分なり。と云ふ。主人、それは知れたる事なり。此方の暖
簾内のこと、荷物はいか程も仕入るべし。平に右百三十兩の金は渡すべ

し。今まで私の手前にて貯へたる金二十兩あり。これにて店を開き、商を始
め申すべし。さて私は外の商賣も存じ申さぬことなれば、やはり酒商賣
を仕るつもりなり。右につきては、當御店より荷をも御廻し下さるべし。
それにて私は十分なり。と云ふ。主人、それは知れたる事なり。此方の暖
簾内のこと、荷物はいか程も仕入るべし。平に右百三十兩の金は渡すべ

し。」と云ふ。番頭甚だ感恩の體にて取らず、唯荷さへ御廻し下さらば是より深き御恩有るべからず。」と云ひて、金をば終に辭退す。

さて右の主人の丁稚の内に一人年のほど十三四の小僧、右の番頭の前に出て、承れば、此の度別家を成され、店を御取立てなさるゝ由なり。酒屋は樽拾も入ることなれば、何卒私を新店の樽拾に差置き下さるべし。」と云ふ。番頭大いに驚き、それは畢竟只今まで、彼此世話をしたる故、其の報恩に我等の新店へ來りたしと云ふ、殊勝のことなるべし。されども、それは子供心のやうなる事にてはなし。そなたはやはり此の店に居らるべし。此の大家に奉公したる者は、わしが家には居られず、我等も入用になし、又ずつと貧なる家の子を丁稚に使ひて、樽を拾はするつもり。其の事は決して料簡違なるべし。」と云ふ。

小僧動店、右の丁稚大いに笑ひて云ふ、私は左様なる者に非ず、大家・小家の分別を存ぜぬにもあらず、富家・貧家の暮し方を見ぬにも非ず。私考へみるに、凡そ

商賣のことは、大小貧富と別るゝことなり。今大富にても仕方にて小貧にもなるべし。今小貧なりとも仕方にて大富になることなり。大小を選ぶに及ばず、出精の淺深を擇びて、大富になるべき人に事へて、其の仕方を見覚え聞覺ゆること肝要なるべし。されば商の上手なる人に事ふるこそ丁稚の幸なれ。平に私を召遣はれ下さるべし。親方へは私より願ふなり。」と云ひて、主人へ此のわけを云ひて、新店に附きて行きたき由を願へり。主人も尤のことなり」とて此の番頭に勧め、右の小僧を遣りたり。番頭も子供にて一度は珍しき故、新店へ來たく思ひても、朝夕香の物ばかりにて茶漬をくひ、主従二人淋しく暮さば、直に飽きていやに思ふべしと、度々言聞かすれども、丁稚合點せぬ故、已むことを得ず、新店に右の小僧を引取れり。

ナ新店の繁華を振、さて新店はなるほど質素の店にて漸く疊を入れたるばかりの家にて、天井もなし、座敷もなし、店と臺所とばかりなり。さて朝まだ暗きうちより

起きて掃除を始め、また夜の明けぬうちに茶を沸し、ちよつと茶漬をたべて、兩人とも店へ出て商をす。丁稚は酒を運ぶ、亭主は帳合をすると云ふことにて、何もほかのことなし。さて凡そ商人に限らず職人にも百姓

鳴筋道説

にても奉公人にも己が業をだに出精すれば評判も宜しく繁昌すること

此は消局的と天の理なり

此の新店の評判宜しく、其の繁昌すること、飯田町中に比

すう積極類なし

是、外に譯あるに非ず、しる物をよくして利を少く取り、多く商を

して、入合する故なり。少しの間に大いに身上もよくなりたり。

小僧勤儉

さて一日主人店にて、帳合をする内、鯛屋鮮魚をかつぎて賣りあるくを見

て、心に思ふに、さて久しく鮮魚をくはぬことなり。

丁稚も心に鮮魚を喰

ひたかるべければ、此の鯛を買ふべし。」と思ひて、右の魚屋を呼びて鯛を買

ふ。なるほど錢は出さぬ男なれども、物和らかにわけのよき男ゆゑ、鯛屋

も鯛をまけて、元直同前に賣りて、六つにて二十文に直段極りて、皿を持ち

て出て、買取るばかりの處へ、彼の小僧歸りて大いに驚き、親方何を買はる

下からかき用
つけれは己

るぞと云ふ。亭主、久しく鮮魚をくはず、そなたにも食はせぬこと故、至つて安き鯛ゆゑ六つ買ひたるなり。」と云ふ。小僧大いに諫めて、平に止められよ。」と云ふ。亭主、魚屋のまへ氣の毒ゆゑ、直段も極りたることなれば、買はねばならず、殊に魚屋どのも、彼是直段の相談にて隙取りたれば、今更止むれば魚屋の損なり。」と云ふ。小僧云ふやう、魚屋に損をかくること甚だあしき事なり。此の鯛六つにて二十文なれば利も八文なるべし。八文の錢を此方より出して止めらるべし。」と云ひて、魚屋に對して色々言譯を云ひて、八文唯やりて止めんと云ふ。魚屋も唯錢を取るわけなき故、錢を取らず、小僧八文が酒をつぎて魚屋に振舞ひて返す。魚屋も是非々々魚を進らせんと云へども、小僧一向合點せず、たうとう魚屋を返す。さて亭主丁稚に向ひ、鯛を買はぬは聞えたるが、八文錢をやらんと云ひたることが不思議なり。安くまけたる魚を買はずに錢をとらすること損の上の損なるべし。」と云ふ。小僧の云ふは、徳の上の徳なり。其のわけは

操得徳
得利

嗚呼及不待
誠志乃不待
神人乃不待
鬼神乃不待

首の奥系
（上はツボカリー）

三結語（信巻）

鯛を二十文にて買へば、薪も入るなり、醤油も入るなり。さて口を喜ばしむるばかりなり。鯛を食ひたる明日も、茶漬を食ひたる明日も何も變りたることなし。鯛を食ひたる後は、又食ひたいと思ふこと口の慾なり。茶漬より外に口に入れねば、口は茶漬の旨きことより外に知らず。唯口にても目にても、餘り喜ばしむること、大いに心の毒なり。唯喜も哀もなければ、心動かで宜しきなり。茶漬の明くる日も、茶漬を食へば喜も哀もなし。鯛の明くる日に茶漬を食へば、旨くなき故哀なり。此の如く心を用ひねば、身は廻らず。と云ふ。番頭涙を流し、さてく面白き事を聞くもかな。如何にも其の通りなり。とて、此の小僧を不思議の人なりと思ひ、其の後は何事も家事の相談せしに、果して此の小僧すさまじき者にて、又飯田町の下へ店を出したるに、殊の外大家になり、其の家を右の亭主に傳へ、上の家を貰ひて、今に三家共に榮えたり。

なるを以て、乃木將軍の氣に入りたるなり。三戸の萬屋の中、今に存するは、即ち上の萬屋にて、即ち彼の小僧の開きたる酒店なり。今や將軍の眷顧を得て、萬屋の聲譽また新に都下に馳するに至れるも亦宜なるかな。

（軍神乃木大將）

駿馬分
支店

一
部分
全体

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」と云ふ評判と同時に、仲平さんは不男だ。」と云ふ蔭言が清武一郷に傳へられて居た。

仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地があつて、そこに三棟の家を建て、住んでゐる。財産としては宅地を少し離れた處に田畑を持つて居た。年來、家で漢學を人の子弟に教へる傍、耕作を輟めず

一七 安井息軒

森 林 太 郎

たのである。しかし仲平の父は三十八のとき江戸に修業に出て、中一年置いて、四十のとき歸國してから、段々オロシク飮肥ウチケ藩で任用せられるやうになつたので、田畑の大部分をば小作人につくらせることにしてゐた。



安 井 息 軒

仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つの時、父は兄弟を残して、江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人とも毎朝書物を懐中して、畑打に出た。そして外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。父が始めて藩の教授にせられた頃の事である。十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人が皆言ひ合せたやうに二人を見較べて、連ツレがあれば、連ツレに何事をかさ、やいた。脊の高い、色の白い目

偶然ヒラキ、
然シカ、
然シカ

鼻立ちの立派な兄文治と、脊の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱瘡チンソウが兄は軽く、弟は重く、弟は大痘痕オホソウアトになつて、剩ノミヤへ右の目が潰れた。父も小さい時、疱瘡をして、片目になつてゐるのに、又仲平が同じかたはになつたのを思へば、偶然運の事と云ふものも残酷なものだと云ふ外はない。仲平は兄と一しよに歩くのをつらく思つた。そこで朝は少し早目に食事を済ませて、一足先に出、晩は少し居残つて仕事をして、一足遅れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て、連とさ、やくことは息まなかつた。そればかりではない。兄と一しよに歩く時よりも行逢ふ人の態度は餘程無遠慮になつて、さ、やく聲も常より高く、中には聲を掛けるものさへある

「見い、けふは猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに、猿の方が猿引よりは好く讀むさうな。」

「お猿さん、けふは猿引はどうしましたな。」

交通の狭い土地で、行逢ふ人は大抵識り合つた仲であつた。仲平は一人（ヒツギ）で歩いて見て、二つの發見をした。一つは、自分がこれまで兄の庇護の下（ヒツギ）に立つてゐながら、それを悟らなかつたと云ふことである。今一つは、驚くべし、兄と自分とに渾名（アヤナ）が附いてゐて、醜い自分が猿と云はれると同時に、兄までが猿引と云はれてゐると云ふことである。仲平はこの發見を胸に藏めて、誰にも話さなかつたが、その後は強ひて兄と離れ（ヒツギ）に田畑へ往返しようとはしなかつた。

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修業に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目（ヒツギ）の藏屋敷に着いて、長屋の一間を借りて、自炊（ヒツギ）をしてゐた。儉約の爲に

心理描寫

加藤 篠崎小竹

名は弱 通稱長左衛門

大阪の儒者 門 嘉永四年

(五二)没 年七十一

大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。中一年置いて、二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖（ヒツギ）は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、兎角病氣で、たうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訃音（ヒツギ）を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

その後仲平は二十六で、江戸に出て、古賀侗庵（ヒツギ）の門下に籍を置いて、昌平（ヒツギ）巒に入つた。後世の註疏（ヒツギ）に據らずに經義を窮めようとする仲平がためには、古賀より松崎（ヒツギ）懺堂の方が懐かしかつたが、昌平巒に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、脊の低い田舎書生はこゝでも同窓に馬鹿にせられずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓着に黙り込んで、ひとり讀書に耽つてゐた。座右の柱に半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

古賀侗庵

名は煙 通稱小太郎 幕府の儒者

弘化四年 (三三)没 年六十

松崎懺堂

名は密 掛川藩に仕へた經學者

弘化元年 (三〇)没 年七十四

今は音を忍が岡の時鳥
(時鳥) 鳥かおのり鳴りて居りし

と書いてあつた。

いつか雲井のよそに名のらん。
いふ時鳥をたのむはよそに大は名をたのむはあつた

秋春

湯経
時経
書経

礼
九

「や、えらい抱負ぢやぞ。」と友達は笑つて去つたが、腹の中では稍氣味悪くも

漢前後(解經)
吉話
馬

しばかり研究したので、わざと流儀違の和歌の眞似をして、同窓の擲掄に

年十

翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。そして

その年の正月から清武村中野に藩の學問所が立つことになつて、工事の
最中であつた。それが落成すると、六十一になる父滄洲翁と、昨年江戸か
ら藩主の供をして歸つた二十九になる仲平さんとが、父子共に講壇に立
つ筈であつた。

萩野由之

國史家
國文學者
文學博士
東京帝國大
學教授
萬延元年
(二重)生

一八 青葉の笛

萩野由之

平家が一の谷の軍に敗れて我先にと落ちて行く時の有様は、晩春の夜嵐
に逐はれて、花といふ花が一齊に枝を離れ、行方を定めず空に舞ひ翺るや
うであつた。

この混雜の間に其處彼處に於て、隨分目も當てられぬやうな大悲劇が演

悲劇
喜劇
アリストテレス分類

ぜられたが、こゝに武藏國の住人熊谷次郎直實は、平家の公達貴公子が助船に乗らうとして海岸の方に續々落ちて行くのを見て、「天晴好い大將軍と引組んで功名をしよう。」と思ひ、細道にかゝつて途を急ぎ濱手の方に遣つて來た。

練絹ヒヤウカヒカの絹に鶴の刺繡をした直垂ヒヤウカヒカに萌木匂ヒヤウカヒカの鎧を着、鍬形を打つた兜の緒を締め、黄金作りの太刀を佩き、二十四さした截生の矢を負ひ、滋籐シトウの弓を持ち、連錢葦毛シトウの馬に金覆輪の鞍を置いて乗つた一騎の若武者が、沖に居る船を目がけて馬をさつと海に打入れ、はや十間ばかりも向ふに泳がせた。丁度その時濱に遣つて來た熊谷は、それを見るより鎧を踏ん張り聲を上げ、

「其處に御渡りあるは平家方の大將軍と見たてまつる、敵に後を見せ給ふか、返させ給へ、返させ給へ。」と扇扇上げて招くと、其の人は健氣男ウレシムにも駒の首を立て直して此方に返し、

汀水際に上らうとする所を、熊谷得たりと波打際で馬上ながらにむんづと組着き、馬と馬との間に二人はどつと落ちたが、直實は苦もなく敵を組伏せて動かせず、すでに首を搔かうとして兜を押除けて見るところに、こはそもいかに、野獸のやうな坂東武者の眼には、「地上の世界にこんな美しい人が居るであらうか。」と疑はれるほどの美少年。正しく平家の公達と見え、花のやうな顔サシに薄化粧し、齒は黒々と鐵漿カネに染め、玉なす眼の涼しさよ、年は我が子の小次郎と同年位で、今茲丁度十六七、薰物カキモノの煙えならぬ香氣カキモノが鼻を撲つて、熊谷にはどうしても、これが敵とは思はれぬ。寄せては返す浦波の濱邊の白砂に組敷きながら直實は問うた。

「そもや御身は如何なる御方にて渡らせ給ふぞ。名のらせ給へ、助けまゐらせう。」

「まづさう云ふ和殿は誰ぞ」

「武藏國の住人熊谷次郎直實と申すものでござる。」

「さては汝が爲には好き敵ぞ。名乗らずとも首を取つて人に問へ、後で必ず分るであらう。」

と云つて靜かに目を閉ぢ、既に覺悟の體である。熊谷は取つて押へた手が弛み、天晴好き大將軍ぢや。今日この際、この人一人を討つたからと云つて、負ける軍に勝つべき筈はない。また助けたからと云つて、勝つ軍に負けさうな事は無い。貴賤の別なく子を思ふ親の心は人も我も同じこと、思へば今朝一の谷の西門で、我が子小次郎直家が少々薄手を負うた時でさへ、我は親心に我が肉を殺がれ我が骨を削られるやうな思がしたが、この君此處にて討たれたと聞き給はゞ、いかに戦場の習ひとは云ひながら兩親の御悲歎はいかばかり。よしてん竊に助けまゐらせう。」と決心し、四邊を見れば幸ひ敵も味方も居らぬ。熊谷急に引起し、砂を拂つて沖に見える一番近い船を指し、

「彼の船に早く馬を泳がせ給へ。さあ、今の間に少しも早く。」

と促す儘に若武者は目禮し、馬に乗らんと鎧に片足かけた此の時彼の時殆ど同時に土肥・梶原・平山などが五十騎ばかり、濱邊傳ひに飛んで來る姿が間近く見えた。熊谷は遺憾至極、

「あゝ、御運の末か、是非もなや。」

と歎じてはらゝ涙を流し、

「あれ御覽あれ、生憎と味方の勢が參つたわ。感動いかにもして助け參らせうとは思へども、彼等が來てはよも遁しまゐらせまい。おなじくば我が手にかけて討取り奉り、せめては後の御追福をなりとも懇切に……」
遁れぬ所と若武者も胸を据ゑ

「おなじくば汝が如き情ある武夫に我が首は授けたい、いで……」
と手綱を放し、西に向つて白砂に坐し、早くも凝然と玉の如き眼を閉ぢる。
「然らば御免。」

熊谷心を鬼にして、ずらりと太刀を抜放つ。

君を惜むか龍神の磯うつ波の音高く、濱邊を風の立ち騒ぐ。熊谷早くも後に廻り、(若神)

「南無阿彌陀佛。」

あしきまのりかえ

唱へも果てず、紫電空に跳つたが、我も子をもつ人の親、白刃の下に合掌して、凝然と動かぬ花の容顏雪の肌、餘りに無慙むぜんでいぢらしくて、何處に白刃を當てやうも無い。

「あゝ、我この君を討ち奉るは、いかなる過去の宿縁ぞや。」やせから

目もくれ心も消え果て、直實は前後不覺。

土肥の次郎を先として、續く梶原・平山の武者所、砂煙を上げて飛んで來た。

「今は。」

再び氣を勵まし、

「えゝい。」

首は前に。鮮血見る間に白砂を染め、花は散りけり須磨の浦。代言を止めよ

熊谷茫然として太刀を提げ、死骸を前に凝然と突つ立ち、眉を顰しりめて夢心地して居ると、習々と耳を掠めて哀を吹き行く一路の春風、主なき駒の獨り嘶く。

「やあ熊谷殿には好き敵と組まれしよな。」

横をつと馳せ過ぎざまに言ひ棄て、他の働には目も止めず、土肥等は、各自好き敵を搜して向ふに駆去つた。

直實は我に復り、

「あゝ、弓矢取る家には生れぬものぢや。我武藝の家の人とならずば、今

日かうした憂き目は見まいものを、情なくも終に討つ取り奉つたか。」

涙は情の記念である。鬼を酔で食ふ坂東武者も鎧の袖を顔に押しあて押しあて潜々と泣いて居たが、首を包まうと思つて、鎧や直垂を解いて見ると、あはれや錦の袋に入れた笛をば腰に挿して居る。熊谷これを見て膝を打ち、

野蠻と文化の接觸

「お、忘れもせぬ今朝の曉に城の櫓に笛の音の起るを聞き、身にしみじみと物のあはれを覺えたが、彼の床しい音色の主はあゝ、さてはくこの君にてありたるか…… 今日味方の東國勢、何萬騎と云ふ内で、軍の陣中に笛などをば持つやうな心がけの人は一人たりともありはすまい。さてく雲の上人は優しいものぢや。」

直實感じてこの笛を首に添へ、大將軍義經の見參に入ると、見る人毎に涙を啜つて涙を流した。

その後平家の捕虜に訊して、これは修理大夫經盛の末子、無官大夫敦盛と云つて、生年十七歳になる公達の首であると云ふことが分り、また件の笛は名を「青葉」と云つて祖父忠盛が笛の上手であつたので、鳥羽院より下し賜はつたのを其の子經盛に傳へ、經盛は敦盛に笛の器量があつたので、この笛を傳へたのだと云ふ事が分つた。熊谷はこれを聞いて、敦盛の首と笛とを義經に請ひ受けて、二つながら父經盛の許に送つたが、熊谷は今度

青葉と云ふ
小枝笛

敦盛を討つたのが動機に成つて發心し佛門に入つて其の亡き跡を慰撫に弔つたと云ふことである。(平家物語讀本)

一九 薩摩の健兒

田中白茅

田中白茅
名は常盛
薩摩國出水
郡阿久根村
の人
教育家
明治六年生
阿久根郷
連兒社
兵兒歌
自己描寫

七歳の時、彼は始めて小學校に入學し、同時に稚兒仲間に入つた。稚兒仲間といふは即ち少年團といふ意味で、七歳以上十四歳までの者が、此の團員であつた。十五歳になれば、兵兒二歳となつて兵兒の交際をするのである。兵兒は大概二十二三歳まで、兵兒が畢れば、妻を娶つて大歳になるのである。

十四歳を稚兒頭といひ、略して頭といつた。頭は幾人もある。これも生月日の長少で、一番頭、二番頭とある。そして、其の仲間の者を稱して同志

といつてゐた。頭は仲間に對しては、絶對命令で、非常に恐しい者であつたが、また頗る親切に下を勞つたものである。（うしろもちやうなげゆめらめ命令）

彼が始めて稚兒仲間に入つた年の夏、遠足があつた。彼は四十になる今日も、よく覚えてゐる。

一番頭があつて采配を振り、二番頭・三番頭など之

に副として、大小幾旒（後本）の旗を押立て、法螺貝を吹き、隊伍肅々として郊外

に向つて繰出すのである。郊外に出ると、ク（山）ロ（野）ス（橋）カ（た）ン（人）ツ（競）リ（走）をやる。一

番頭が、先頭に立つて采配を振り、進めと叫んで駆出すと、全隊は隊伍整然、

之に尾して又駆出す。田の中、畑の中、山といはず、岡といはず、道のある處

道のない處、藪の中でも、絶壁の間でも、處嫌はず突破させる。若し、ぐづぐ

づして少しでも後れよう者なら、二番頭や三番頭が、役せん（役せん）といつて、木刀

を以て尻を叩くのである。此の「役せん」の一語は武士たる者の第一の恥

辱であるので、泣くくも足を引きずつて駆けるのであつた。激勵しな

がら、（若し）いかに頭がきく。心では泣きながらも、いや。ちつともしん

どごわはん」と答へる。腹が減つてもひもじうないといふのが、武士の嗜であつた。

かくて、とある丘陵の上に着いた。彼の手足は荊（イバラ）で引つかれ、足の爪は

巖角で蹴起され、血だらけになつてゐた。他の同志も、大小皆疵を負うて

ゐた。此處で、又もや駆けくらべや、角力や旗奪や、色々の事をやらせる。

皆スバルタ風の鍛錬で、七つの彼は半分は泣いてゐた。

其の次に、太陽を睨まされた。六月の炎天に、野に出て、太陽と睨みつこを

やるのである。頭の者がよしと云ふまで、瞬きだにしてはならない。彼

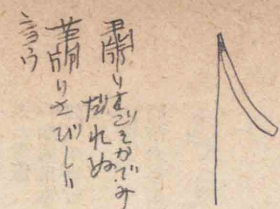
はこれくらゐ苦しいことはなかつた。眼から涙が出て、濟んだ後も、暫く

は眩んで物も見えなかつた。

高松川といふ川が町の傍を流れてゐる。京の加茂川に似た美しい川で

三十六瀬日夜潺湲（なみぞ）と音立てゝゐる。深い淵もある。遠足の歸（か）きには、そ

こに引張つて行つて水練をやらせるのである。頭の者は五間も十間も



ある崖の上から、深淵に飛込む。彼は此の日始めて二間ばかりの處から飛ばされた。臆してえ飛ばぬ者が二三人あつたので、皆高みに引張つて行つて、役せん男だ。といつて、突き落された。水も習はせる。かづきえない者は頭を押へて水に押込み、ひどい目に遇はされる。水懸もやらせる。彼は水懸には強かつた。

擊劍は平素の日課で、十一二歳になれば、お面お小手を着けて、打込の稽古をやり立合をやる。天氣の好い日には走りくらを奨励し、雨蕭々として月暗き夜は物寂しい墓地に向つて膽試しをやつた。大將防ぎ石合戦などは彼等の最も好んで行ふものであつた。大將防ぎは獷猛な蠻的な薩摩隼人の氣風を露骨に表してゐる。まづ城を劃して、敵と味方の二つに分れ、一は防禦軍、一は攻圍軍とし、防禦軍は旗を擁して大將を護る。旗は高さ三四間もある大孟宗竹の竿頭に立てゝある。攻圍軍は突貫して敵を攻撃し、竿に攀ち上つて旗を奪ふのである。頗る壯快なもので、敵味方

入り亂れて戦ふ様は、まるで喧嘩である。實戦同様である。

石合戦は川原や海邊に出てやるのである。敵味方相對峙し、呼び、叫び、蒐けつ、引きつ、石を飛ばすこと雨霰の如く、頭に中り、體に中れども、物ともせず、彈丸の中を潜つて敵陣に突貫し、敵將目掛けて猛射する。五郎といふ少年があつた。八町礫の紀平次も跣足といふ剛の者で、石を飛ばすこと一二町。勇猛無比、誰一人敵する者がなかつた。彼の石も可なり飛んだ。彼の眉間には、今にも眞一文字の疵が残つてゐる。此の合戦の記念である。

十五の春、彼は兵兒二歳となつて兵兒仲間に入つた。兵兒と云ふ言葉は兵卒たるべき健兒といふ意味で、一朝事ある日には、この兵兒が先鋒となり、中堅となつて戦争をやるのである。二歳といふのは青年といふ意味で、その上に兵兒を冠せしめたのは、百姓町人の二歳と區別するためである。

天地と差
弱壇の差
候、鎌倉時代、
信、
Rー 平定朝の口
信

侍は常々節義を嗜み申すべく候。節義の嗜と申すは口に偽を言はず、

十五の年、兵兒の仲間に入つて兵兒の交際をするのは、丁度小學から進んで中學に入學すると同様なものである。けれどもその元氣、その自覺に於ては月と鼈との差がある。彼等兵兒は男を磨くのである、此の男一匹を鍛ふのである。心身を鍛錬し修養して君の御用に立たせるのである。彼等はまづ第一にかう自覺した。彼が今も誦誦して一語も誤たないも

に終らず、實行實踐となつてそこに大なる權威と尊貴とを齎したものである。(九州の一角より) 行か

二〇 天の配劑

菊池 寛

菊池寛
文學者
明治二十一年生
〇 元藝春秋
一、すり居る心持
場内
二、運命の不意議
オ、直感

自分が京都に居たとき、いろ／＼な物が安かつた。食費が月に六圓だつた。尤も朝が六錢で晝と晩が八錢づゝだつた。一日二十二錢の譯なのだ、月極めにすると二十錢に負けてくれるのだつた。素人の家の間を借りて居たが、間代が二圓だつた。尤も、自分は大學生として最もつましい生活をして居たには違ない。が、食と住とが僅か十圓以下で足りたかと思ふと、隔世の感がある。

二十圓足らず送つて貰つて居た學費でも、さう不自由もしなかつた。そ

二〇 天の配劑

久米

名は正雄

文學者

明治二十四

年生

狂言

滑稽

芝居

芝居

芝居

芝居

芝居

芝居

の頃の五圓十圓は、それほど有難かつた。

大正二年の十一月だつた。

河合武雄の公衆劇團が京都へ來た。

一番目

が「茶を作る家」と云ふ狂言だつた。

愛蘭劇を翻譯したものだつた。

友人

の久米が、東京で見て、面白いから是非見ろと云ふ葉書を寄越して來た。

その頃、近代劇を専攻して居た自分は、今よりも芝居に對して熱心だつた。

自分は初日が開くのを、待ちあぐんで居た。

忘れもしない十一月八日が

初日だつた。

丁度土曜日だつた。

その時自分の墓口には、六圓と幾らかあつた。

それがその月中の小遣だ

つたのだ。

京都座の前で、自分は何等を買はうかと一寸思案した。

が、そ

の頃は極度に節儉だつた自分は、四等を買つてしまつた。

三十錢の觀覽

料が、初日だつたので半額の十五錢だつたのだ。

汚い四等席の疊の上へ、自分は腰を落着けた。

が、自分はこんなことを考

へた。

たとへ、四等に蹲つて居ても、こゝに集つて居る見物の殆ど凡てよ

りも、芝居については、分つて居るのだ。

さう思ふと、淋しい瘠我慢が出來

た。

自分は、可なり熱心に見て居た。

一幕目が終つたときだつた、自分の横へ、一人の職人風の若い男が來て坐

つた。

青い棒縞の汚い着物を着て居た。

「これ、何と云ふ芝居ですか。」と云つたやうな調子で、狂言に對する自分の

註釋を求めた。

芝居に對する知識を、内心で得意にして居た自分は、さう

訊かれると、得意になつて話し出した。

公衆劇團の性質やら、狂言の主題

や、新劇運動の趣旨と云つたやうなものを、得意になつて話したやうに覺

えて居る。

若者は、熱心に聽いて居るやうな風をして居た。

二幕目が始る前に、自分は便所へ立つた。

席へかへらうとしたときに、も

う幕が開いて居た。

強ひて歸るほどの席でもなかつた。

廊下へも澤山

の人が立つて見て居たので、自分も其處で立つて見ることにした。

さう

した方が、四等席で見るよりも、よく見えたのである。

二幕が、もう終りか

けた時であつた。四十ばかりの女が、自分の背後から靠れかゝるやうにした。自分は、その様子を變に思つた。自分は、胸摸ではないかと直覺的に思つた。自分は急いで左の袂を探つて見た。自分が怖れた通り、臺口が無くなつて居たのである。念のために右の袂を探つた。が、其處に自分の手に觸れたのは、堅い下足札だけであつたのである。

自分は、全つきりその四十女が盗んだものと確信した。

「君は僕の臺口を知らないか。」と、自分はそんな風に、露骨に云ひ出したやうに記憶して居る。

「まあ！此れがけつたたがたいもないこと云ひなはんな。」と、その女も怒つた。自分達が、二三度押し問答をして居る内に、相手の女は二三人の味方を得た。氣が附くと、その女は劇場のお茶子であつたのである。同類らしい女達が見る／＼うちに、七八人も集つた。口不調法な自分は、手もなく云ひこめられてしまつた。そのうちに、相手の方には、お茶子の取締らしい男まで

加つてしまつた。その四十女は可なり周囲の者から信用があるらしかつた。自分がいくら言ひ争つても、何も證據はなかつた。おしまひには、自分の方が旗色が悪くなつて、謝罪までさせられさうになつた。自分は口惜しかつた。金を取られた上に散々云ひこめられて謝罪まで、しなければならないやうになつたのが、残念だつた。自分は臨監の巡查にまで訴へた。が、少しも取上げてはくれなかつた。お茶子達の言ひ分を信じて居るらしい巡查は、その女を調べて見ることさへしなかつた。が、自分もその中に、ふと四等席で、自分の横に坐つて居た若者の事を思ひ附いた。自分が芝居のことを訊かれて得意になつてしやべつて居るときに、まんまとやられたのだと云ふ氣がした。自分はさう氣が附くとすぐ、四等席に歸つて見た。其の若者はもう其處には居なかつた。芝居を見る氣持などは少しも残つて居なかつた。その月中の小遣をすつかり盗られてしまつた上、間違つた云ひがかりをして、散々やつ附けら

れたことが、可なり不愉快であつた。快々として、少しも楽しまなかつた。他人から學資を仰いで居た自分は、他に一錢だつて算段するあてはなかつた。一文も小遣なしに、その月中は辛抱しなければならなかつたのだ。自分はけちくして四等に這入つた事までが、不快であつた。盗られてしまふ金だつたら、十錢でも二十錢でも澤山使つておけばよかつたと思つた。

月末まで二十日あまりも一文もなしに暮さねばならぬことを思ふと、自分分はしよげきつてしまつた。

翌日は日曜日だつた。平素は早く起きる自分だつたが、その日は起きる元氣がなかつた。十二時過になつてから漸く起き上つた。自分は起きると下へ行く梯子段に萬朝報が置いてあるのを取上げた。京都では東京の各新聞は丁度一時頃に配達されるのだつた。自分は何氣なく萬朝報を取上げた。その日は、丁度日曜であつた。自分がふと四面へ目をや

ると、其處に自分が二月も前に投書した懸賞小説が當選して居るのだつた。投書してから一月位は、當選するかと待つて居たが、いくら待つても出ないので、もうすっかり忘れて居たのであつた。

自分は、近き過去に於て此の時位嬉しいことはなかつた。その時に得た懸賞金の十圓位、有難く忝い金はなかつた。自分は嬉しさの餘り、思はず涙ぐんだほどだつた。その時まで、自分は運命と云ふものを全體として悪意のあるものだと感じて居た。が、此の時始めて馬琴（漢馬琴、見六傳）の小説にあるやうに、天の配劑と云ふことを感じた。攝理（神道）と云ふやうなことを感じた。

自分は其の懸賞金を受取ると、盗難に逢つた六圓を補つた残り、晩秋の大和へつましい小旅行を企てたのであつた。（菊池寛全集）

（質素）

日七月一年三十正大
濟定檢省部文

大大大大大
正正正正正
十十十十十
二二二二一
年年年年年
十十一十二
一一一一二
月月月月月
三廿十廿廿
十七八五八
日日日日日
修修訂訂發
正正正正
三三再再
版版版版
發發發發
行行行行



本館發行
の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附致可候

印刷者

四 海 民 藏

東京市神田區通神保町六番地

發行所

光 風 館 書 店

(電話 區内手七三四〇番)
(振替口座東京三二七番)

東京市神田區通神保町六番地

發行者

上 原 才 一 郎

東京市神田區通神保町六番地

編者

吉 田 彌 平

東京市小石川區高田老松町五十二番地

卷三	定	價	大正十
卷四	金三拾七	錢	年度
卷五	金三拾五	錢	臨時
	金三拾三	錢	定價
	金六拾七	錢	
	金六拾三	錢	
	金五拾九	錢	

現代文新鈔卷二

現代文新鈔卷二終

山口縣師範學校寄附金

三原武義

現代文新鈔卷二



Handwritten vertical text on the left page, including the characters "山" and "廣".

山
廣
縣
師
範
學
校
廣
東
武
義



山口縣師範
行兼

広島大学図書

2000302230



文庫
24
230